石川県埋蔵文化財情報

創　刊　号

ごあいさつ ……理事長　西　貞夫

巻頭カラー

創刊にあたって……センター所長　谷内尾晋司…（１）

新施設の概要 ……企画課長　福島正実…（２）

1998（平成10年度）上半期の発掘調査 ……調査部長　小嶋芳孝…（４）

発掘調査略報 ……（６）

1　梅田B遺跡（E地区）

2　白江梯川遺跡（第９次調査）

3　戸水B遺跡（第11次調査）

4　藤江B遺跡（第５次調査）

5　藤江C遺跡A１･B２･E地区（第７次調査）

6　末松A遺跡

7　南黒丸遺跡

8　経王寺遺跡

9　額谷遺跡

10　金沢城跡（本丸附段調査区）

11　金沢城跡（三の丸東調査区）

12　梅田B遺跡（新幹線I－A区）

戸水B遺跡（第12次調査）の堅果類を出す土坑について ……本田秀生…(34)

［発掘余話］金沢城跡五十間長屋出土の「鍬始」刻石 ……北野博司…(36)

九泉 ……柿田祐司・田村昌宏・滝川重徳…(40)

1999年3月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

ごあいさつ

財団法人石川県埋蔵文化財センターは、石川県立埋蔵文化財センターと社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が統合し、平成10年４月に発足しました。当センターは埋蔵文化財を発掘調査し、出土品の整理・収蔵を行うとともに、出土品を活用した各種の展覧会や、体験発掘、講座などを開催し、学校教育や生涯教育の場として一般の方が歴史や文化に親しみ、埋蔵文化財に対する理解を深めていただけるような開放型の施設として設立されました。

開所以来、県内各地で埋蔵文化財の発掘調査を一層推進するとともに、発掘調査成果をいち早く公表し、活用していただくため、広報誌『いしかわの遺跡』の発刊、発掘調査現地説明会、ロビー展示などを進めてきました。

このたび発刊する『石川県埋蔵文化財情報』は、当センターが実施した発掘調査の成果や、県内各地の埋蔵文化財に関する最新の情報を皆様におとどけできるようとりまとめました。本書が埋蔵文化財の研究、保護・活用の上でお役に立ち、暖かいご指導やご援助がいただければ幸いに存じます。

財団法人石川県埋蔵文化財センター

理事長　西　　貞　夫

鍬形木製品出土状況（梅田Ｂ遺跡Ｅ地区）

ＳＥ001（上）と丸木舟（下）（藤江Ｃ遺跡Ｂ1地区）

宝暦十三年鍬始刻石
（金沢城跡　五十間長屋）

創刊にあたって

センター所長　谷内尾　晋司

石川県埋蔵文化財センターは、平成10年4月、金沢市中戸町に新施設が整備されたことに伴い、従来の石川県立埋蔵文化財センターと社団法人石川県埋蔵文化財保存協会を組織統合して、新たに財団法人として発足いたしました。

当センターは、埋蔵文化財の発掘調査、出土品整理・収蔵はもとより、発掘調査成果を活用した各種の展覧会や体験発掘・講座などを開催するなど、学校教育、生涯学習の場として広く開放することで、県民が郷土の歴史や文化に身近に親しみ、埋蔵文化財に対する理解を深めていただくことを基本方針としております。

日本列島のほぼ中央部に位置する石川県は、古くから我が国の東西文化の結節点としての役割を果たすとともに、日本海にその雄姿を誇る能登半島と霊峰白山を仰ぐ加賀平野という二つの特徴的な地域から成り立つことから、海・山の文化を含めた個性豊かな深みのある歴史土壌を育んでまいりました。現在、本県には、これらの歴史・文化の証人でもある埋蔵文化財包蔵地の存在が約6,900箇所ほど周知されております。これらの埋蔵文化財包蔵地が、土木工事などの開発事業により近年急速に失われつつあり、記録保存のための発掘調査が当センターはじめ市町村教委の手で盛んに行われています。

文化庁の調べによると、全国で年間（Ｈ９実績）約9,500件、約1,500万m^2の発掘調査が実施されており、発掘に携わる調査員は約5,500人、調査費は約1,000億円に達するそうであります。ちなみに、本県（H10実績）では、県、市町村を含め76件、約24万m^2の発掘調査が実施されております。これらの発掘調査により、今まで知られなかった情報が得られ、連日のように「最古」、「最大」、「初めて」といった見出しの記事が新聞紙上を賑わしていますが、それは話題性を持つ限られた極僅かな情報にすぎません。多大な経費と労力を費やしているにも関わらず、発掘調査により得られた出土品などの多くの貴重な情報は、一般に公表されることなく、収蔵庫等の片隅に眠ったままになっているのが現状ではないでしょうか。

また、埋蔵文化財（遺跡）が土木工事などの開発事業によりその実体が失われ、二度と見ることが不可能である以上、その調査記録や出土品が唯一残された公の遺産であり、それを速やかに公表し、学術研究の資料に資するとともに、その成果を学校教育や生涯学習などに広く活用することが私たちに課せられた責務であります。しかしながら、戸外での発掘調査に追われ、さらに、調査量の増加に伴い出土品等の調査成果も膨大なものとなってきたため、関係者がその内容を的確に整理、把握し、調査報告書として早期に公表することが困難になっているのが、残念ですが本県の実情であります。

こうした状況に鑑み、県下の発掘調査の概要など新鮮な情報をとりまとめ、『石川県埋蔵文化財情報』として年二回刊行することにいたしました。従来この種の情報誌は、関係調査機関や研究者などに対しての情報提供を目的とすることが多いのですが、職員一同あまり肩肘張らず専門的に偏らない内容とすることに心がけ、県下の埋蔵文化財に関する幅広い情報を一般にも解り易く提供できるよう努力したいと考えております。

本書が埋蔵文化財の研究および保護・活用のうえでお役にたてれば幸いに存じます。

新施設の概要

企画課長　福 島 正 実

新しい施設は、金沢市郊外の犀川と内川が合流する緑豊かな台地上、約42,000m²の敷地に、本館棟（RC造２階建、延床面積約3,600m²）、収蔵庫棟（S造２階建、延床面積約4,300m²）等で構成されている。建物外観は周囲の景観と調和するように階高を抑え、本館屋根を瓦葺きとする等、和風で落ち着いた意匠としている。一方、建物内部は調査整理、出土品及び資料の収蔵保管、公開活用の各機能別エリアを明確に区分するとともに、公開エリアーについてはバリアフリー施策に基づき、エレベーター、手摺り等が設置されている。

本館内の調査整理関係諸室は各室とも大区画とし、設備等も含めてほぼ相似した仕様とすることで作業規模に応じた配置変更を容易に行うことを可能としている。また、写真、洗浄室、金属製品保存処理室、修復作業室等も設置され、調査・保存処理に必要な基本的分析装置（X線透視装置、蛍光X線分析装置他）が導入されている。一方、収蔵庫棟には各種保存処理装置が設置された木製品保存処理室が併設されている。

収蔵施設は保存環境面から、特別収蔵庫（本館内）、定温定湿収蔵庫、低温収蔵庫、大型水槽、一般収蔵庫の５種類の出土品収蔵庫等に区分されている。中でも床面積の大部分を占め、約60,000箱の収蔵能力を誇る一般収蔵庫は、積層棚を使用することで建設費の低コスト化を図っている。記録資料（図面、写真等）は本館内の資料保存室で定温定湿環境で保管され、隣接する図書室では約50,000冊の発掘調査報告書、専門図書が開架されている。これらの出土品、資料はバーコードを利用した資料管理システムによって一元管理することになり、データの入力等の整備を進めている。

展示室は小規模ながらも、埋蔵文化財を通じて県内の歴史と文化を易しく学べるよう、各コーナーとも様々な工夫が凝らされている。導入部の「サイバーミュージアム」は、1/50,000石川県立体地図と120インチマルチビジョンを連携させた映像展示システムであり、「調べてみよう石川の遺跡」（地図上での遺跡位置表示を含む画像データベース）「遺跡発掘ものがたり」（ビデオライブラリー）「歴史のアルバム」（スライドショー）の三つの映像展示メニューを持つ。県内各地の遺跡や出土品から人々の暮らしの変化を紹介する二つのコーナーでは、展示品はガラスケース内ではなく、展示台の上に並べられており、埋蔵文化財をより身近に感じ取ることができるよう配慮されている。「ミクロの考古学」は出土品をCCDカメラを操作して30倍に拡大表示させることができ、人気コーナーの一つとなっている。２階には旧石器時代から江戸時代までの代表的な出土品を時代順に展示した「時の回廊」が続いている。このほか、ホールでも発掘速報などの企画展を開いており、新聞報道等で話題となった県内の遺跡の調査成果や出土品を即座に見学することができる。また、展示室に隣接する研修室は、120名が収容可能で、団体見学時のガイダンスや、埋蔵文化財をテーマとした研修会・講座の開催等に活用されている。

埋蔵文化財センターでは、今後、展示室を核にして、埋蔵文化財の普及啓発活動を様々な形で展開していく計画であるが、平成13年度には竪穴住居や体験工房を備えた歴史体験公園がセンター敷地内にオープンする予定である。学校教育や生涯学習の場として、これまで以上に県民の皆さんに愛され、活用していただける施設となるよう努力を重ねていきたい。

（利用案内　開館時間　午前９時～午後５時（展示室への入室は午後４時30分まで）
休館日　12月29日～1月3日、及び資料の展示替え又は整理の期間）

石川県埋蔵文化財センター全景

展示室

収蔵庫

資料整理室

木製品保存処理室

1998（平成10年度）上半期の発掘調査

調査部長　小 嶋 芳 孝

４月１日から（財）石川県埋蔵文化財センターが発足し、県立埋蔵文化財センターと（社）石川県埋蔵文化財保存協会に所属していた職員が合同することとなった。今年度の調査計画については、２月頃から文化財課を中心に協議と準備が進められてきた。しかし、新センター設立準備や移転作業を並行して進めなければならず、２月～４月当初の作業は困難を極めた。ともかくも、３月末には引っ越し作業が完了し、４月に入って新センターの体制で業務を開始した。

今年度、当初に石川県教育委員会から委託を受けた発掘調査は29遺跡だった。その内訳は、建設省事業が６遺跡で34,500m²　・鉄道建設公団が２遺跡で6,000m²・県土木部が15遺跡で50,700m²・県企画部が２遺跡で14,100m²・県農林水産部が4遺跡で3,390m²で、総面積は108,690m²だった。これだけの事業を受ける新センターの調査体制は、調査部に四つの調査課を配置して総員51名で実施した。各調査課の担当と職員数を下に記す。

調査第一課　15名　国関係事業
調査第二課　13名　区画整理事業・農林関係事業
調査第三課　　9名　土木部関係事業
調査第四課　13名　金沢城跡・能登空港・新幹線など（輪島市・珠洲市・穴水町からの併任職員３名を含む）

今年度上半期の調査成果は次ページ以降に詳細が報告されているが、これまでの課題を以下に整理しておきたい。全般的には、遺構検出状況に即応した調査方法の工夫、複数年次にわたる調査で検出した遺構番号の整理や統一、遺跡全体像と調査区の関係を的確に把握する調査技術の確立、遺跡の重要度の判断方法、遺物整理と報告書刊行までの作業計画の作成などが、今後の検討課題と考えている。

金沢城跡　当初は菱櫓の復元整備に伴う調査と、宮守（いもり）堀復元に伴う調査が計画されていた。ところが、菱櫓に続く五十間長屋と続櫓の復元も計画され、結果的に当初は想定していなかった大規模な石垣の解体調査を実施することとなった。石垣解体に伴う調査は、仙台城や盛岡城などの先行調査例を参考にしながら進めているが、文献史学や城郭・石垣の研究者を交えた調査委員会を設けて、その指導の下で調査を行うのが望ましい姿と考えている。また、調査の過程で検出した重要な遺構や新発見の遺構を金沢城の整備計画へ如何に反映させるのか、文化財課との連携を含めて今後検討しなければならない課題である。

三引遺跡　平成5年度から調査が行われ、その間に県立埋文センター・（社）石川県埋蔵文化財保存協会と調査機関が変遷してきた。豊富な遺物を出土する縄文時代前期初頭の貝塚調査と資料整理について、これまでの調査では体制を確立できないまま過ぎてきており、今後の検討課題と考えている。

駅西区画整理関係事業　平成６年から調査が始まり、今年度が最後の調査年度である。これまでの調査で膨大な資料を発掘しており、遺物整理から発掘調査報告書刊行までの体制を如何に整備するのかが課題である。

九谷A遺跡　九谷ダム建設に伴って、平成６年度から調査を行っている。これまでに、戦国時代から江戸初期の遺構や遺物を検出しており、平成８年度には江戸初期に盛土造成した地区から色絵磁器の破片を検出するなど、隣接する古九谷窯の関係が注目される遺跡である。今年度は、台風による災害のため現地に入る道路が通行止となり現地調査はできなかったが、遺跡の重要部分の保存のために工事計画との調整が今後の課題である。

平成10年埋蔵文化財発掘調査予定表

（平成10年５月現在）

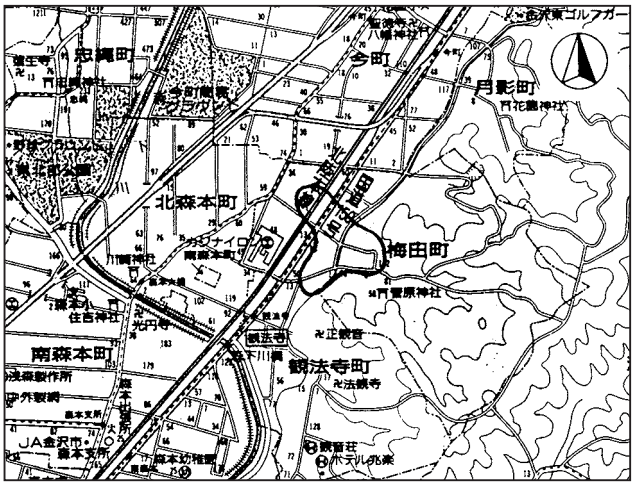
調査課	遺　跡　名	担　当　者	調査予定面積	調査期間	工事事業名	事業者
第一課	大長野A遺跡	田村・布尾	5,000	4月～12月	小松バイパス	建設省
	梅田B遺跡	岡本・柿田 松浦・宮川勝 荒木・河村	15,000	4月～12月	東部環状	
	観法寺古墳群	安中・河合	3,000	8月～12月	東部環状	
	四柳白山下遺跡	川畑・白田	5,000	4月～12月	鹿島バイパス	
	四柳ミツコ遺跡	林・加藤克	5,000	4月～12月	鹿島バイパス	
	国道関係の小計		33,000			
	白江梯川遺跡	安中・河合	1,500	4月～7月	梯川改修	
	梯川改修関係の小計		1,500			
	調査第一課の小計		34,500			
第二課	藤江B遺跡	中森・藤井		4月～10月	金沢西部土地区画整理	都市計画課
	藤江C遺跡	本田・春田 岩瀬・西田 大西・浅香	27,700	4月～12月	金沢西部土地区画整理	
	戸水B遺跡	久田・三谷		4月～9月	金沢西部土地区画整理	
	金沢西部土地区画整理の小計		27,770			
	戸水B遺跡（県庁）	本田・岩瀬 （四課中西・宮川彩）	3,100	9月～12月	県庁舎移転関連	県庁舎建設局
	末松遺跡	安・立原	800	4月～6月	ほ場整備	農地整備課
	柴山出村遺跡他	安・立原	1,000	7月～10月	ほ場整備	
	川田オジョカヤマ遺跡	安・立原	290	9月～11月	ほ場整備	
	指江遺跡他	久田・三谷	1,200	9月～11月	ほ場整備	
	矢崎、宮の下遺跡	久田・三谷	100	12月	ほ場整備	
	農林関係の小計		3,390			
	調査第二課の小計		31,160			
第三課	三引C・D遺跡	金山・湊屋	6,200	4月～12月	能越道ふるさと支援道	道路建設課
	南黒丸遺跡	浜崎・和田	2,600	4月～8月	国道改築249号	
	真脇製塩遺跡	垣内・兼田	400	10月～11月	県道改良	
	経王寺遺跡	垣内・菅野	1,500	4月～9月	街路	都市計画課
	国分遺跡	浜崎・和田	900	10月～11月	御祓川改修	河川課
	九谷A遺跡	垣内・兼田	1,000	11月～12月	九谷ダム	河川開発課
	額谷遺跡	土屋・兼田	850	4月～8月	街路	都市計画課
	近岡遺跡	土屋・菅野	2,000	9月～12月	金沢港	港湾課
	調査第三課の小計		15,450			
第四課	金沢城（城内）	滝川・熊谷・土田	7,000	4月～12月	金沢城跡公園整備	公園緑地課
	金沢城（宮守堀）	三浦・端		6月～10月		
	梅田B遺跡他	松山・湯川	6,000	4月～7月	新幹線	鉄建公団
	倉見オウラント遺跡	松山・湯川		7月～12		
	能登空港	端・中西・宮川彩 砂上・辻本・宮越	11,000	4月～10月	能登空港	空港企画
	北塚遺跡	三浦・宮川彩	480	4月～6月	西部緑地公園整備	公園緑地課
	調査第四課の小計		24,480			
	総　合　計		108,690			

[発掘調査略報]

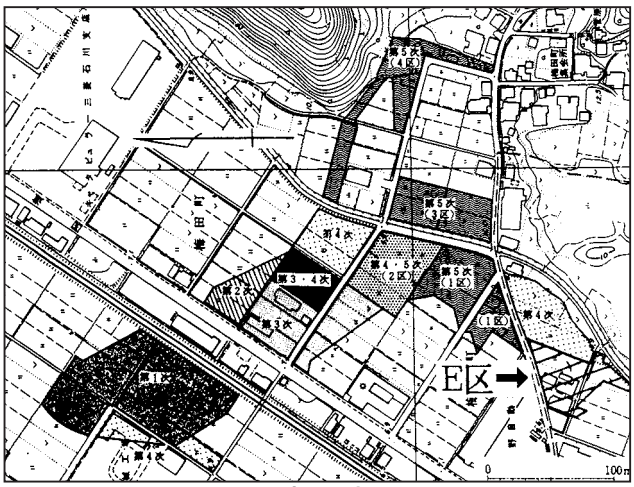
1　梅田B遺跡（E地区）

所在地　金沢市梅田町地内　　**調査期間　平成10年5月25日～平成10年9月25日**

調査面積　2,000m²　　**調査担当　松浦郁乃　宮川勝次**



遺跡位置図（S=1/30,000）



調査区区割

梅田B遺跡は、一般国道８号金沢東部環状道路改築工事に伴い発掘調査が平成５年度より行われ、本年度で第６次調査となる。E地区は第４次調査（平成８年度）が行われたK区と調査区東辺部を接している。

K区では古代の自然河道、中世と考えられている総柱建物跡、溝が多数検出されている。遺物では古代の土器・瓦や、「寺」と刻書された土師器椀も出土している。K区で検出された溝はほとんどが本年度調査のE区に向かって東西方向に流路を取っており、調査当初から、大まかではあるが遺構密度の予想が可能であった。

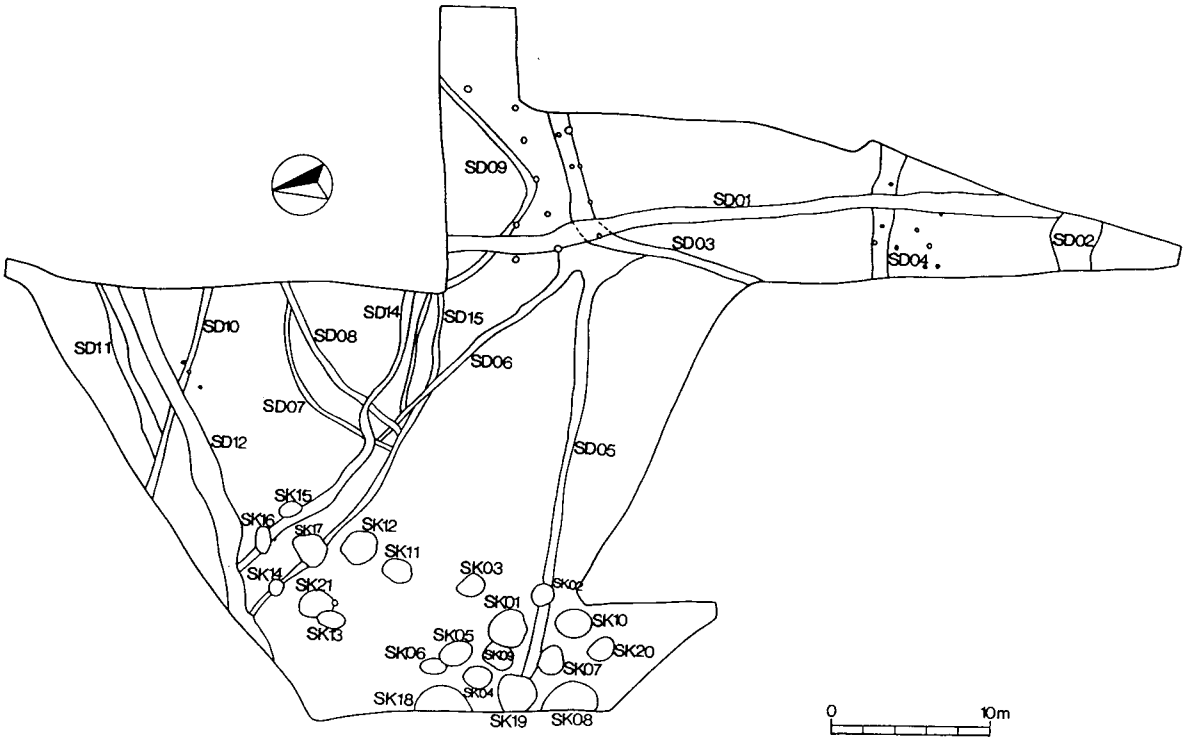
本年度の調査区からは溝15条、中世と考えられる３間×４間（５間の可能性もあり）の総柱建物跡1棟、土坑21基を検出した。SD01はほぼ直線的に南北へとのびる溝で、K区や第５次調査（１区）でもその続きとなる溝が確認されている。幅は約１mで断面が逆台形を呈しており、人工的に掘削された溝と考えられる。他年度の調査によれば、弥生時代後期にはすでに存在したとされ、農業用の灌漑施設などの性格が考えられる。今年度の調査においては土器の小片が出土したのみで、時

調査区全景

期の特定が可能なものは確認されなかった。SD12の所属時期は出土遺物から10世紀後半代と思われる。

調査区の西側、標高が約6.5mのあたりから土坑が21基検出された。土坑は円形もしくは楕円形を呈しており、径が１～２m、深さが１m前後である。断面の壁は抉れ、底面は擂り鉢状となり「袋状土坑」と呼ばれるものに形態は類似する。ほとんどが一気に埋め戻されたものと思われる。数基の土坑の覆土から、SD12出土の土器より若干古いか、もしくはほぼ同時期とみられる遺物が出土した。各土坑はかなり密集して作られるが、ほとんどが切り合いを持たずに作られている。この土坑群の性格は現在のところ不明である。時期は異なるが、梅田B遺跡では土坑群が数カ所で確認されており、貯蔵穴もしくは粘土採掘坑と考えられているが、こちらも現在検討中である。

出土遺物はあまり多くなく、SD12から出土したものがそのほとんどである。10世紀後半から11世紀初頭にかけての土師器椀がその中心であり、溝底となる粗砂層から出土した。特筆すべきのものとしてSD12から出土した、一木の鍬形の木製品があげられる。身の刃部先端を欠いているもののほぼ完形である。身は幅12cm、長さ23cm、厚さ1.5cm、柄の長さ72cm、柄角度72°である。刃部先端に鉄製の刃先がつくものと考えられる。民俗資料に一木の鍬は見られるものの、考古資料において県内では、現在のところその類例は見られない。刃部先端を欠いているとはいえ、柄や軸部分は欠損はしておらず、未だ使用に耐えうるものと思われる点、すぐ横から断面が四角の棒状木製品が出土したのみで、他に木製品は見られない点などから、祭り等に伴う廃棄とも考えられる。実用品か否か、その性格を明らかにして行かねばならない。（松浦）

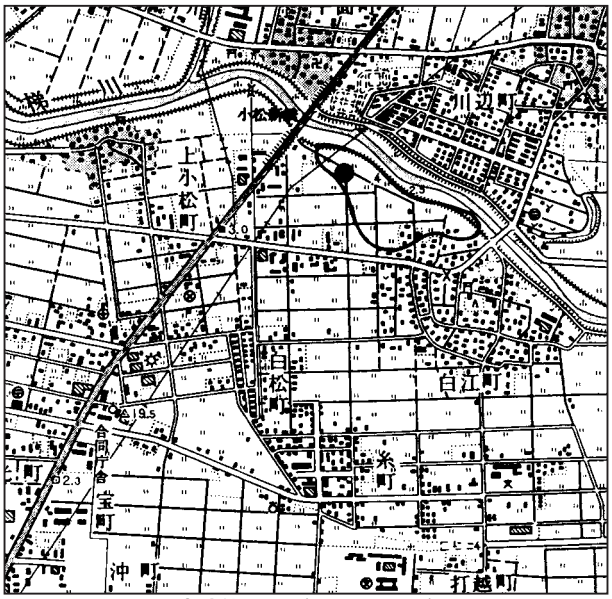


遺構全体図

2　白江梯川遺跡（第9次調査）

所在地　小松市白江町地内　　**調査期間　平成10年5月18日～平成10年8月12日**

調査面積　1,500m²　　**調査担当　安中哲徳　河合　忍**



遺跡位置図（S=1/25,000）

今年度調査区は、昨年度調査区の西側に位置している。調査予定地中央付近の農道をはさんで東側を東区、西側を西区とした。

東区および西区東側からは溝や土坑などが検出されたが、遺構面は梯川流域地区の工業汚染土除去を目的とした客土工事によって大幅な削平を受けており、遺物は土師器や陶磁器の小片が若干出土するにとどまっている。西区西側では顕著な遺構が認められないことから、当遺跡上層（中世集落）の西限を示すものと考えられる。

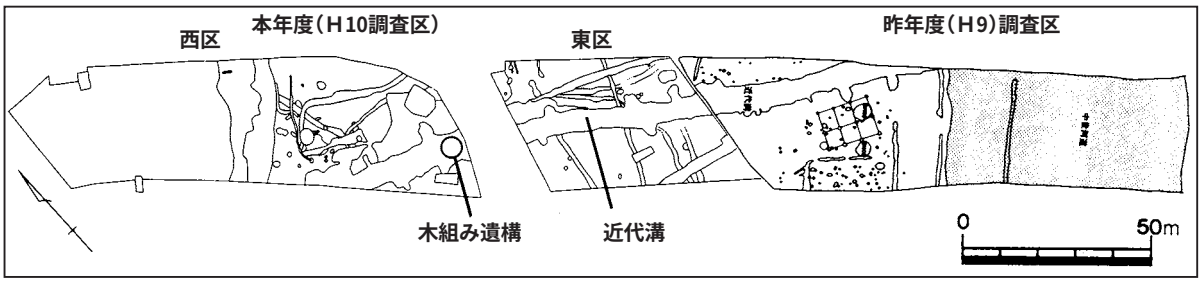
調査区のほぼ中央を流れる近代の溝からは椀や箸など多量の木製品・陶磁器などの出土のほか、木を組み合わせた施設などが検出されており、この施設の下部からは、基礎工事を行う際に埋納されたと考えられる柄の削り取られた近世の鏡も出土している。

なお、東区の中世遺構面の基盤層は昨年度調査区同様、古墳時代前期の遺物包含層となっており、西区東側では土器（壺・甕・高坏等）がいくつかのまとまりをもって出土しており、弥生時代後期～終末期の遺物包含層となっていることが判明した。

さらに、下層の状況を確認するために５ヶ所で試掘坑を設定し、調査を行った。東区では上層遺構面から1.5m掘り下げた箇所で砂層中に木片が集中していることを確認し、その中から加工が施されたものも1点確認した（下層）。これまでの試掘調査の結果（西区西側）からも、下層からは弥生時代後期の土器数点及び木製品が多量に出土していることがわかっており、注目される。

また、西区東側では遺構面から約50cm掘り下げたところで溝やピットが検出された。遺物は1点も出土しなかったが、生産域が広がっていたことが想定できる（中層）。

今年度の調査により当調査区付近においては、木製品を多量に出土する弥生時代後期以前の自然河川と考えられる下層（海抜0.5m以下）のほかに、新たに時期不明ではあるものの、水田などの生産域が広がっていたと考えられる中層（海抜1.0m前後・一部では2面ある可能性がある）、そして弥生時代後期～古墳時代前期の完形品の土器を多量に含む上層遺構面直下の遺物包含層（海抜1.3～1.5m）の存在を確認することができた。　（河合）



調査区全体図（S=1/1,000）

東区全景から（北から）

西区全景（南東から）

西区近代溝内木組み遺構出土状況

西区上層遺構面基盤層出土弥生土器

西区下層確認トレンチ遺構検出状況（中層）

東区下層確認トレンチ木製品等出土状況（下層）

3　戸水B遺跡（第11次調査）

所在地　金沢市藤江北４丁目地内　　調査期間　平成10年５月11日～平成10年９月16日

調査面積　5,100m²　　調査担当　久田正弘　三谷正輝

遺跡位置図（S=1/25,000）

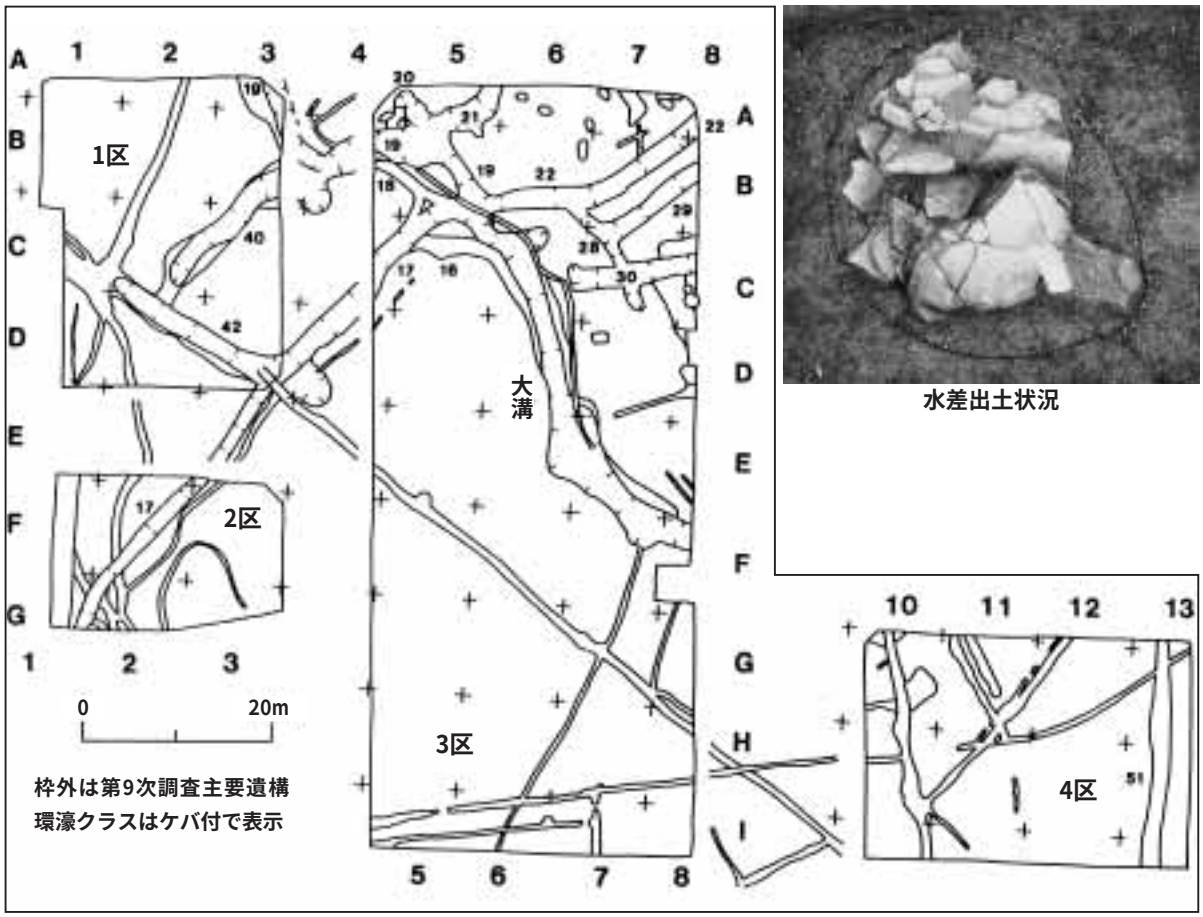
調査区は戸水B遺跡の南西部に位置し、大きく４地区に別れている。調査区全体はほ場整備によって削られたために、包含層は存在せず、遺構検出面の標高は3.1～3.5mである。

大溝はF８区からA３区にかけて緩くS字状に巡っていおり、B・C５区ではSD17・21・22が合流していた。合流部より北西側では分流が認められたので、本流部分をSD19と呼称した。大溝は戸水B式期に断面逆台形に掘られており、最終段階（法仏式～古墳前期）にやや幅が広くなり浅い皿状となっていた。この時期で溝は殆ど機能していなかったと思われる。大溝の幅は1.7～2.7mであり、最終段階では2.6～４m、E６・７区では６mであった。深さは70～80cmである。大溝は金沢西高校第１体育館下（第12次SD013）から、4区北側道路下（第７次SD701）に続き、B4区（第９次環濠・SX901）を経由して、１区北側道路下（第２次SD27）に続いている。また北側にも延びていることが確認されている。この溝は戸水B遺跡の南側をU字状に囲んでいることから、環濠と思われる。SD17・21・22・28～30・40・42は全て戸水B式期に断面逆台形に掘られ、大溝・SD19に連結している。分布調査の際に南西側に近接する藤江C遺跡と戸水B遺跡の間には鞍部が存在することが、確認されており、SD17はその鞍部から環濠に水を引き入れていた可能性があげられる。土坑は10基ほど検出し、多くの土坑は底ないし覆土下層に炭化物層が確認された。B６区の土坑は他の土坑よりやや深いので、井戸の可能性も考えられよう。戸水B式期の遺構には、覆土に炭化物層が入ったり、炭化材が多く出土していることなどから、集落内で火災があったことが想定される。

土器は第9次調査同様に法仏式、布留甕が若干確認されているが　戸水B式土器が殆どを占める。近江系甕の出土がやや多くみられ、赤彩高杯、畿内系模倣高杯なども確認している。木製品は鳥形木製品（？）１点、鍬先破片１点、容器破片１点、槽・盤破片１点、棒状木製品２点、刳物底板４点、大足・田下駄の縦枠破片（？）３点、不明板などが出土し、これらは全て戸水B式期のものである。刳物容器の底板は、12×（11）cmの楕円形、17.5cmの円形、7.5cmの円形、6.5×6.7cmの楕円形がある。最後の底板は完形品であり、厚さ9mmで、側面に7箇所の目釘跡を持つ。長辺の中心から２mmずれた所に直径４mmの孔があけられており、紡錘車に転用されている。不明板は何かの部材の一部と思われ、短辺の片方が生きており、長さ（28）cm、幅（８）cm、厚さ５mmである。先端から4.4～５cmの部分に楕円形の穴を持ち、5.8cm間を置いて、長方形の２組１対の差し込み穴があり、６cmの間をおいてもう1組確認される。この穴群に平行して、隅円方形の穴群も存在する。石器では横刃形石器と思われる貝殻状剥片や玉作関係遺物を確認している。

弥生時代以外の遺物は古代の須恵器、中世の陶磁器（珠洲焼、青磁など）、近世陶磁器が少量出土している。3区南端の東西溝群と４区の溝群が古代に属するものと思われる。G３～A２区には近世以降の用水路と思われる溝が存在する。　（久田）

戸水Ｂ遺跡遠景



水差出土状況

主要遺構配置図（1/800）

4　藤江B遺跡（第5次調査）

所在地　金沢市藤江1・2丁目地内

調査面積　1,850m²

遺跡位置図（Ｓ=1/25,000）

調査期間　平成10年5月6日～平成10年8月21日

調査担当　中森　茂明　藤井　秀明

藤江B遺跡は、JR金沢駅の北方、犀川・浅野川の二つの河川に挟まれた沖積平野上に立地する遺跡である。本遺跡の南西で北陸自動車道と国道8号線・県道金沢港線（金石街道）が交差している。周辺には西念・南新保遺跡、戸水B遺跡、藤江C遺跡などがある。昭和40年代、国道８号線金沢バイパス工事の際に実施された調査で「石田庄」と書かれた墨書土器が多数出土している。また、大型の掘立柱建物も検出されていることから、本遺跡は文献史料にはみらない初期荘園の一部であることが確認されている。

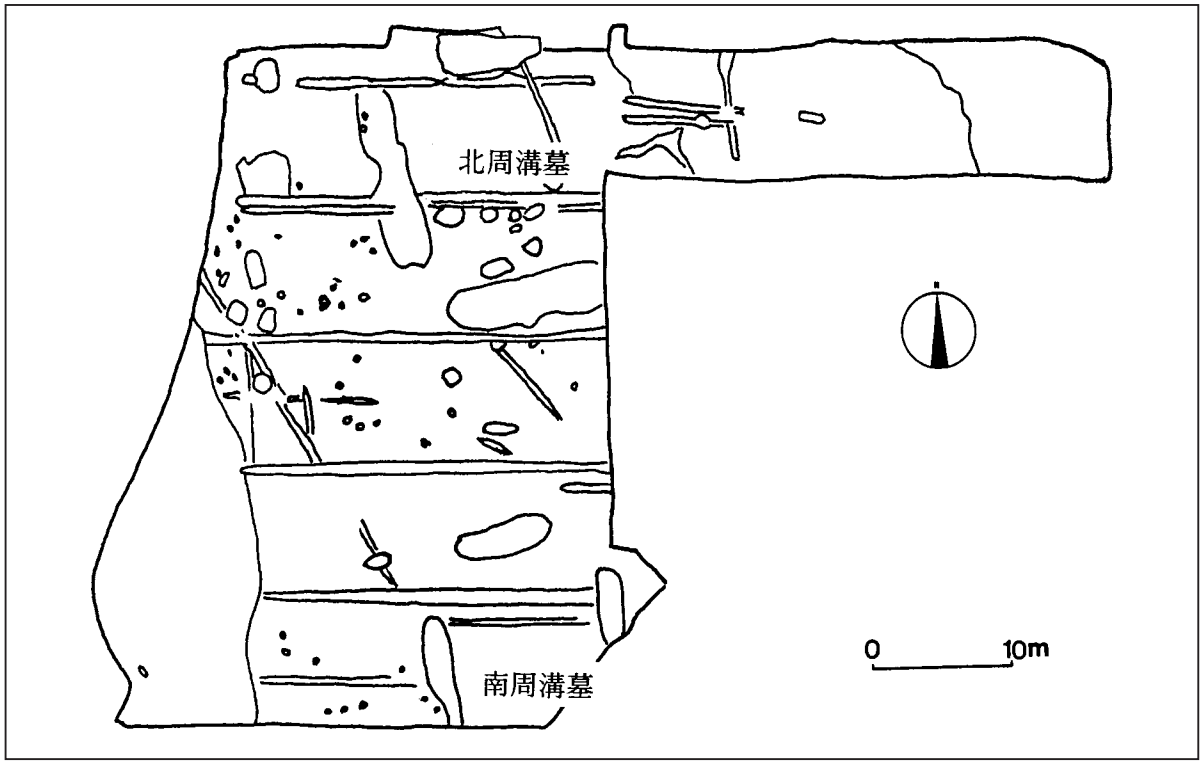
本年度は第５次調査にとそれにひきづいての第６次調査が行われた。第６次調査の終了をもって平成6年より行われてきた藤江B遺跡の調査はすべて完了した。

第５次調査では、方形周溝墓２基、河川１条、溝30条余りと、土坑、小穴多数を検出した。方形周溝墓については、調査区北端と南端の2地点で確認され、それぞれ北周溝墓・南周溝墓とした。両周溝墓ともにいわゆる四隅が切れるタイプの周溝をもつことが大きな特徴である。このタイプの方形周溝墓は県内では松任市の旭遺跡群などでも検出されている。ただし、北周溝墓については周溝は一周することはなく、東側部分はおそらくは削平により失われていた。周溝はそれぞれ約10～12mを測るが、残存状態は良好とはいえない。

一方、南周溝墓についても、今回検出された周溝は順にSD01、SD02、SD03とした西側・北側・東側の３ヶ所のみであった。ところが、平成6年の第1次調査において、調査区北に土坑が検出されており、これが今回検出された３つの周溝に対応するものであると考えられる。南周溝墓における周溝はそれぞれ約７～８mを測るものであった。残存状況は北周溝に比較して良好であるといえる。しかし、両周溝墓ともに主体部を確認することはできなかった。この原因は、さきほどもふれたように削平が著しいことによるものであろう。さらに、遺物の出土量が希薄なため、周溝墓の時期を決定するにはいたらなかった。

調査区北東端からは、自然河道の一部が検出された。これは平成８年の第３次調査の際に、海獣葡萄鏡・中細形銅剣などが出土した自然河道の連続部であるが、今回の調査では特徴的な遺物は出土しなかった。

その他の遺構としては、調査区の西端に大溝が検出された。これは過年度の調査で確認済みの大溝の連続部である。大溝は調査区の南端より約15mの地点でわずかに流路を西に変えている。この大溝からは、過去の調査において遺物が大量に出土しているが、今回の調査ではそれほどの出土量はない。さらに調査区全体をみても、今回の調査では建物を検出しておらず、以上のことから本調査区域は、居住域からはずれた集落の縁辺部であると推定される。（中森）



藤江Ｂ遺跡第５次調査遺構図

南周溝墓

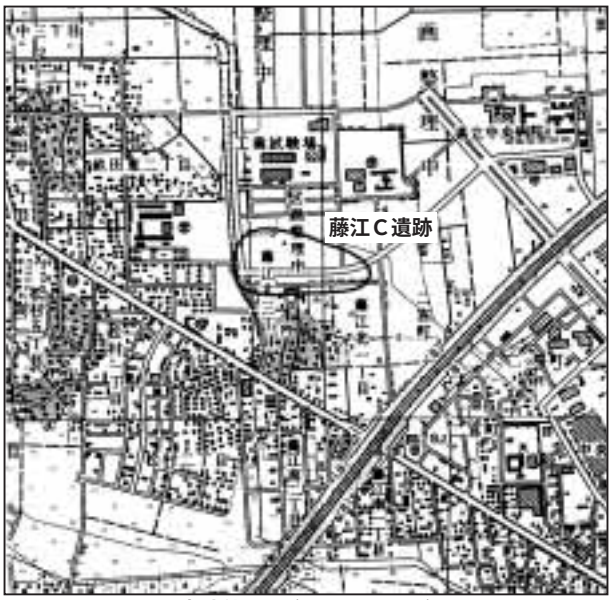
5　藤江C遺跡A１・B１・E地区（第７次調査）

所在地　金沢市藤江北１、2、3丁目地内　　調査期間　平成10年5月11日～平成11年1月8日

調査面積　A１地区　2,240m²　　調査担当　本田秀生　岩瀬由美　大西　顕

B１地区　3,130m²　　西田昌弘　浅香直子　春田幸恵

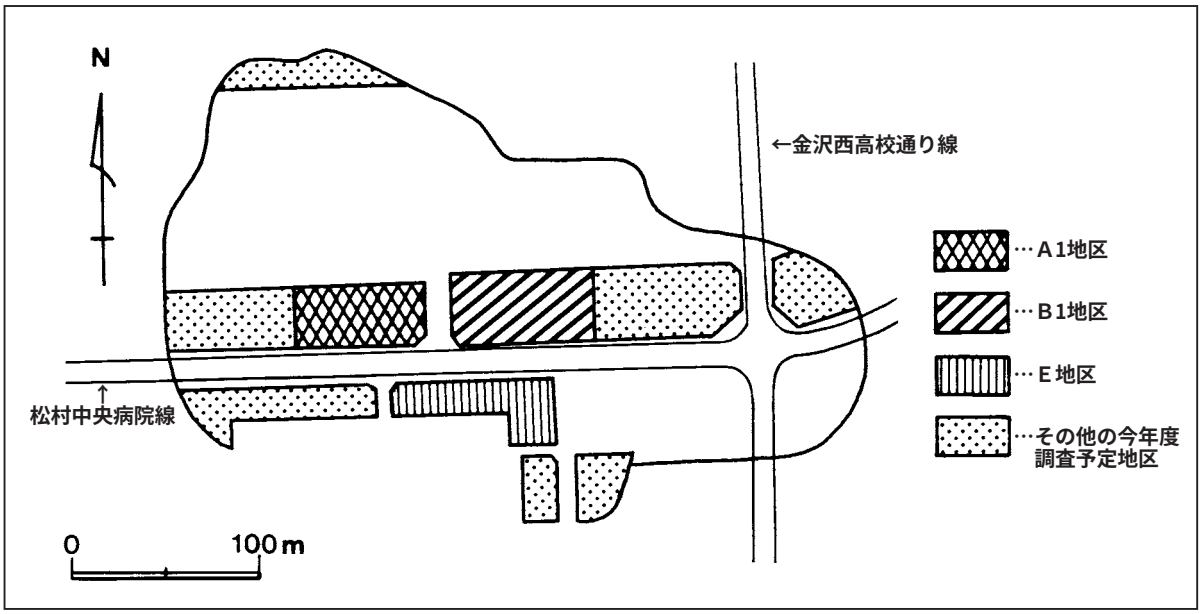
E地区　2,160m²　　加藤裕介



遺跡位置図（S=1/25,000）

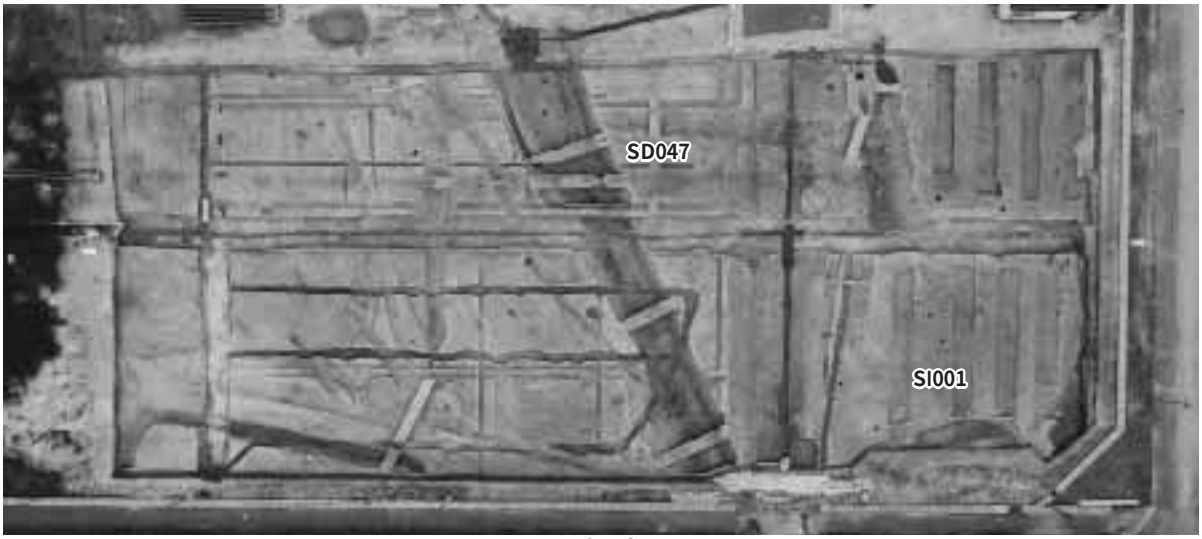
本遺跡は、金沢市街中心地から、北西約５kmほど離れており、付近は金沢平野のなかでも、とくに低湿な地域である。遺跡付近は現在、田園風景の面影を残す平坦な土地となっているが、明治の耕地整理以前は、度重なる洪水によって地面に高低差ができた、起伏に富んだ地形であった。付近でこれまでに発掘された遺跡の多くと同様に、本遺跡もその集落立地に適した微高地上にあり、現在の遺構面は標高4.2m前後となっている。

本調査は、1986年に認可された金沢西部地区土地区画整理事業に係るものである。1990年度からこれまでに、合わせて36,030m²が６次にわたって調査されており、縄文～近世・近代にかけての複合遺跡であることが確認されている。特に、縄文～中世にかけての、集落全域を含んでいることが、本遺跡の特徴といえる。今年度の18,040m²の第７次調査をもって、本遺跡の発掘調査は完了する見込みであり、縄文時代から空白期を挟みながらも、変遷を遂げてきた本遺跡は将来、金沢副都心として生まれ変わる。９月末現在で、A１・B１・Eの3地区、合わせて7,530m²について調査を終えており、以下、この３地区の発掘調査の概要を述べたい。（春田）

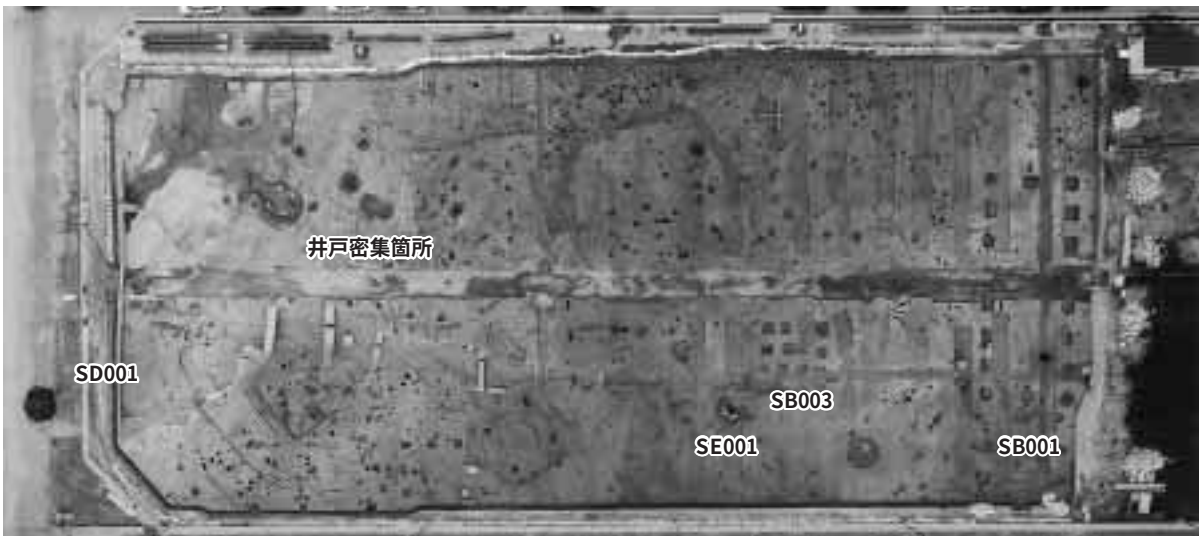


藤江Ｃ遺跡今年度（第7次）調査区（S=1/4,000）

調査区全景



A１地区全景



B１地区全景

E地区全景

註）今年度調査における遺構番号は、SD001以外、各調査区ごとで個別に番号をふった。

［A１地区］

A１地区は、遺跡の中心部やや西側に位置する。確認した主な遺構は、竪穴式建物跡１棟、布掘り建物跡２棟、溝６条、土坑８基があり、遺構の大半を近世以降の溝等が占める。

竪穴式建物跡（SI001）は、近代の土取り溝によって中央部、西端コーナー部が壊されている。主柱穴は、１×１間の方形に４本配置されると思われるが、残存するのは西側の２基のみである。また、住居内には、北辺より中央やや東側に方形の土坑、東辺にも略方形の土坑がある。これらの土坑と住居との関係は不明である。炉址はなく、床面もかなり削平されているものと思われる。遺物は、土師器片がわずかに出土したのみで時期を特定するのは難しいが、B１地区で確認された竪穴式建物跡と比較すると、規模、方向ともに共通することから古墳時代前期のものと考えられる。布掘り建物跡２棟についてもこれとほぼ同時期のものであろう。

溝は、昨年度に行われた第５次調査では独立した形で確認された数条の溝が、本調査区では１カ所に合流した形で検出された（SD047）。溝の幅は約５～７mを測る。遺物は、弥生時代中期から奈良時代までの土器が多量に出土した。弥生時代から古代まで存在した溝であると思われるが、複雑な切り合い関係を呈していることから各々の属する時期を明らかにすることはできなかった。なお、古墳時代前期の遺物を含む溝からは多量の土器が廃棄された状態で出土した。当該期の集落廃絶の際に投棄したものであろうか。溝の南端では堰の痕跡が認められた。北側既調査区では、すでにSD047の北側の続きであるOM502から堰の痕跡が数カ所確認されている。また、この溝を境にして西側にのみ支流が分岐していることが確認でき、用水としての性格をもつものと思われる。これまでの調査により、SD047の東側には古墳時代前期の集落跡が広範囲にわたって展開していることが明らかとなっている。また、溝の西側にのみ支流をもつことからも、この溝を境に東側は居住域、西側は生産域というような土地利用がなされていた可能性が高いといえる。

土坑は、弥生時代中期、古墳時代前期、中世のものが確認できたが、いずれもその性格については明らかではない。なお、中世の遺構は、本調査区北側から北西にかけての既調査区において中世前半期の集落が幅広く展開しており、これらの関係も含めて中世集落の構成を検討していかなければならない。

藤江C遺跡A１地区では、上述したとおり、第５次調査区から連続して続く弥生時代から古代まで存在した溝（SD047）が確認できた。複雑な切り合い関係を呈していることから、個々の詳細を明らかにすることはできなかったが、古墳時代前期から古代にかけてこの溝を境に東西でどのような土地利用がなされていたのか。また、各時代の集落の変遷との関わりなど、これからの課題も数多く残された。

（加藤裕）

竪穴式建物跡（北西から）

SD047（北から）

[Ｂ１地区]

Ｂ１地区は、遺跡の中央部に位置し、遺跡が活発な活動をみせる古墳時代前期から古代にかけての遺構密集地域にあたる。

古墳時代前期の遺構では、自然河道跡（SD001）を調査区西端で検出した。本河道跡は、遺跡中心部を南北にはしり、その両岸には大集落が広がる。層序としては、５層に大別される。河道からの大量の遺物には、弥生時代、古墳時代後期の土器も含まれるが、その流れの中心は古墳時代前期と考えられる。今年度の調査では、河道縁辺部に井戸密集箇所を確認している。刳り貫き桶を枠として転用し、完形の布留甕が出土した井戸跡（SE004）など約10基が連結している。河道の東側では、長軸を北西にふる掘立柱建物約10棟、竪穴式建物３棟、平地式建物１棟など、多数の建物跡を確認している。

古墳時代後期の遺構には、丸木舟を転用した井戸跡（SE001）がある。長さ150cm前後に裁断した丸木舟を、合わせ口にしている。井戸の中には、大量の土器・木製品が廃棄されており、土層中位付近からは、６世紀代と思われる甕や約10個の手捏ね土器などが出土した。木製品では、ひょうたん柄杓や手鎌などが出土している。井戸や遺物の多さから、この時期の集落の存在が推定されるが、現在までのところ、確認はできていない。

古代にはいり、９世紀初頭には、２×７間の大型側柱建物（SB001）、３×３間の総柱建物（SB003）を含む大型建物群が形成されている。この建物群は、1990年度に行われた第1次調査区にのびており、古代の遺構分布域の中心にあたる。このうち側柱建物は、桁行約17.4m、梁行約6.6m、床面積は110m^{2}を越える。柱穴の掘方は一辺約100cmの方形、柱は径35～40cmの円形を呈する。この建物群は一般的集落を凌駕する規模をもち、方格地割にのり、整然と配置されており、少なくとも７棟以上が同一時期に存在したものと推測される。

古代の北陸は、交通手段を海運に依存しており、こうした交通事情から、北陸の初期庄園は、海運の便を重要な立地条件としていた。この点からみれば、遺跡周辺部は屈指の要港をかかえた交通の要衝として、北加賀から中央に向かう玄関口にあたると考えられる。当遺跡に隣接する藤江B遺跡からは、「石田庄」墨書土器が出土しており、遺跡周辺部には、文献史料にはみられない庄園の存在を推測することができる。

今回の調査からは、庄園と直接結びつく遺物は得られなかった。しかし、823年（弘仁14）の加賀立国前後と想定される総柱建物と大型側柱建物を倉庫、第1次調査で検出された2×4間の庇付き建物を事務所として捉えれば、これらの建物群は地域一帯を開発するために設けられた拠点施設と推測される。この大型建物群の詳細な性格については、庄園遺跡としての可能性も含めて、周辺遺跡や過年度調査成果と比較しつつ、検討を進めていきたい。（浅香）

丸木舟を転用した井戸枠（南から）

大型側柱建物検出状況（南から）

［E地区］

本調査区では、弥生から古墳時代にかけての自然河道跡および建物跡を中心として、古代の掘立柱建物跡などを確認している。

調査区西端に位置するSD001は、Ｂ１地区よりつづく自然河道の一部である。上層までは削平の影響を強く受けていたため、Ｂ１地区とは異なり、古墳時代の遺物は稀であった。中層以下からは弥生時代前期の遺物が認められた。また最下層では、当該期の土器とともに、木製品および炭化材の出土が多くみられた。そのなかで、特筆されるものに木製の弓が挙げられる。弓は強く彎曲しており、一端を欠いてはいるものの、現存長で約166cmを計る。先端部には、弦を張るための弭部が作り出されていた。また、弓幹部上半には、３ヶ所の節目に木片を巻いていたと思われる跡が認められる。外彎面には、長軸に沿ってほぼ中央に溝（棒樋）が刻まれていた。

調査区東端を北東－南西方向にはしるSD002は、第１次および翌年度に行われた第２次発掘調査区よりつづく自然河道跡である。遺物は弥生時代中期後半から古墳時代前期のものが大半を占める。これらは、上層から中層にかけて多く出土しており、その分布は河道の西寄りに中心をもつ。本河道は、上層上面で確認した遺物や掘立柱建物跡から、９世紀初頭までにはその機能を失い、ほぼ埋まっていたものと推測される。一方、その上限に関しては、最下層や河道肩部より縄文時代晩期末の土器がみられたことから、当該期までさかのぼりえよう。

この河道跡が機能していた時期の遺構として、周溝をもつ平地式建物跡および布掘り建物跡（SB008）を各1棟確認している。前者は、弥生時代中期後半のものである。調査区のほぼ中央に位置しており、周溝部は削平により深さ４cmほどの浅く途切れた状態であった。推定される周溝の内径は約14mである。６本主柱で、その中央部からは炭化物層を含む炉跡が確認できた。また、周辺で検出したピットの状況からみて、建て替えがなされていた可能性も考えられる。後者は、調査区南東端において確認した。第１次調査区からつづく遺構であり、溝の両端で若干L字に折れる平面プランをもつ。弥生時代終末期頃に建てられたものと推測される。

その後、８世紀後半から９世紀前半になると掘立柱建物がみられるようになる。確認した計８棟の内、この時期に該当するものは５棟であった。第１次調査区よりつづくものもあり、その規模は大きいもので1×7間となる。この他の掘立柱建物跡に関しては、主軸にかなりのばらつきをもっており、遺物も小片であったため、各々の時期を決定するには至っていない。

これら遺構の上面を切るようにして、近世以降の遺構を多数検出している。東西・南北方向にはしる溝群は江戸時代頃に営まれたナシ畑の暗渠排水跡である。この他、河跡や肥溜め、盛り土用の土取り溝等が確認できた。（西田）

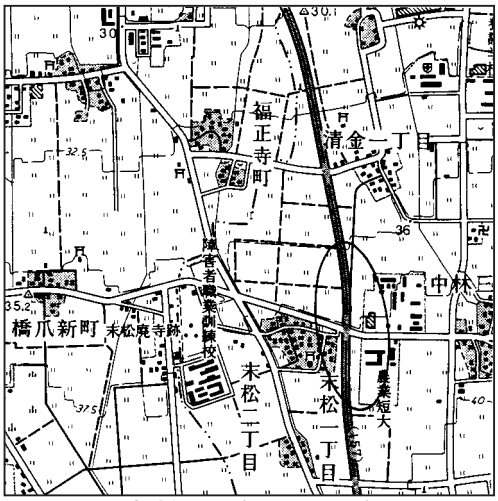
弓出土状況（東から）

平地式建物跡完掘状況（北東から）

6　末松A遺跡

所在地　石川郡野々市町末松地内

調査面積　800m²



遺跡位置図（S=1/25,000）

調査区（南東から）

掘立柱建物と焼土坑（北から）

調査期間　平成10年5月6日～平成10年7月15日

調査担当　安英樹　立原秀明

末松A遺跡は、手取川によって形成された扇状地の扇央部に立地している。末松A遺跡（昭和60～63年の当時は末松遺跡）は過去に、国道157号線鶴来バイパス整備工事と石川県農業短期大学附属農業資源研究所の増築工事を原因とした発掘調査が行われており、７世紀後半～９世紀半ば頃までの集落跡が確認されている。

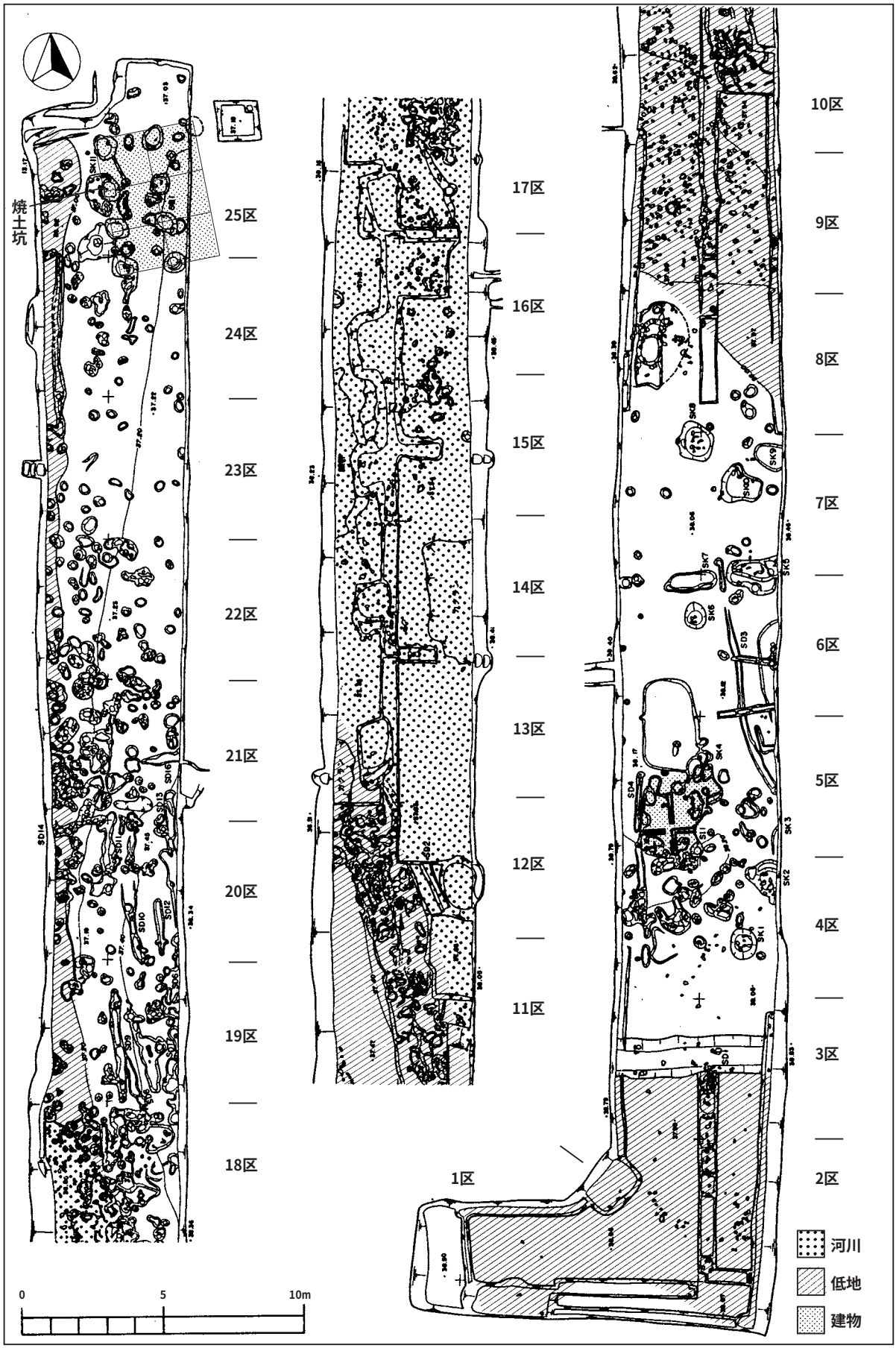
今回の発掘調査は、農村活性化住環境整備事業（野々市地区）に関連する農道部分について実施した。検出した主な遺構は、河川・溝・掘立柱建物・竪穴建物・土坑・ピットである。調査区中央の11区から18区では、南東から北西に走る推定幅25mの河川を検出した。河川の両肩部では、不整形のピットを多数検出した。岸辺に生える植物の根跡だろうか。河川とピットからは、８世紀前半～９世紀前半の須恵器の甕・瓶・蓋杯、土師器の甕などが出土している。

この河川の両側は、微高地になっている。北側の微高地は西に傾斜する地形となっており、19・20区では畑作に伴うとみられる畝溝を検出した。24・25区では掘立柱建物と焼土坑を検出した。建物の規模は、拡張区によって２間×３間の総柱になると考えられる。焼土坑は、掘立柱建物の柱穴と重複している。切り合いから、焼土坑の方が古いことを確認している。

南側微高地の３区では、調査区を東西に横切る溝を検出した。微高地と低地の境に掘られた溝であり、土師器皿の出土から、中世に属すると考えられる。この溝より南は、地形が下降し基盤礫層が露出する状況であり、遺構は確認できなかった。４・５区では竪穴建物とピットを検出した。全体的に著しく削平を受けたと思われ、確認できたのは床面の一部分であった。覆土には、部分的に焼土と炭化物が多く含まれていた。ピットは建物の周囲で検出したが、建物との関係は不明である。８・９区は、表土を除去した段階ですでに基盤礫層が露出しており、河川に向けて下降している状況が確認できた。

調査の結果、微高地と低地の境を明確に確認することができた。そして建物や畝溝の検出からは、微高地上の集落における土地利用について考えることができよう。

（立原）

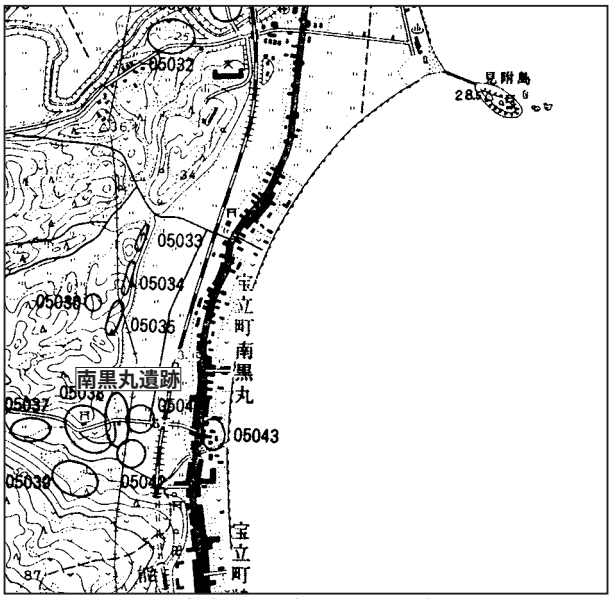


未松Ａ遺跡全体図（Ｓ=1/200）

7　南黒丸遺跡

所在地　珠洲市宝立町南黒丸地内　　調査期間　平成10年5月18日～平成10年9月18日

調査面積　2,600m²　　調査担当　浜崎悟司　和田龍介



遺跡位置図（S=1/25,000）

本遺跡は宝立山地から派生する丘陵裾部に立地し、舟橋川の氾濫によって形成された砂礫層上に営まれた中世の集落遺跡である。一般国道249号線道路改良事業に係る調査として平成８年度に調査が行われており、本年度は第２次にあたる。調査は南から第１・２調査区、第３調査区、第4調査区の、大きく３つの調査区に分けて行った。

遺構は掘立柱建物・井戸・土坑・ピット等が検出された。掘立柱建物は13棟程を復元できたが、特に８年度調査区に隣接する第４調査区で５間×７間を最大とする一群が検出されており、８年度調査で検出された建物群と併せて本遺跡の中心であったことを窺わせる。井戸は20基が確認されており、そのうち１基は底部を打ち欠いた珠洲大甕を井戸側として用いていた。またこの付近で銭貨埋納ピットも確認されている。第１・２調査区南端部では旧舟橋川と推定される河道跡が確認されており、第２調査区が本遺跡の縁辺部となる可能性が高い。

遺物は珠洲焼、中世土師器（すべて回転糸切）、貿易陶磁、各種木製品などが出土している。珠洲焼の時期は吉岡康暢編年のⅡ期～Ⅴ期（13～15世紀）に比定され、第１～３調査区と第４調査区では多少時期の偏りが見られるようである。器種は甕・壺・擂鉢が大半を占め、水瓶や燭台といったやや特殊な器種も散見される。

特筆される遺物として、第２調査区を中心に平瓦・丸瓦が破片を含め50点ほど出土した。軒瓦がなく詳細は不明だが、形状・整形手法などから中世の瓦と考えられる。調査区内では瓦葺建物を想定できる遺構は確認されておらず、付近にその存在が求められよう。なお、本遺跡に隣接する鵜島舟橋のうて遺跡（平成９年度珠洲市教育委員会調査）で本遺跡出土品と色調・胎土等が類似する軒平瓦片が出土しており、関連が注目される。

また調査区全域で縄文土器・石器が散発的に出土しており、第４調査区ではその集中跡が確認された。時期は縄文時代中期後葉の串田新式を主体とし、後期初頭の気屋式も見られるようである。これらの遺物はプライマリーな出土とは考えにくく、調査区南西部に位置する、周知の遺跡である鵜島どうがくち遺跡よりの流れ込みと考えられる。

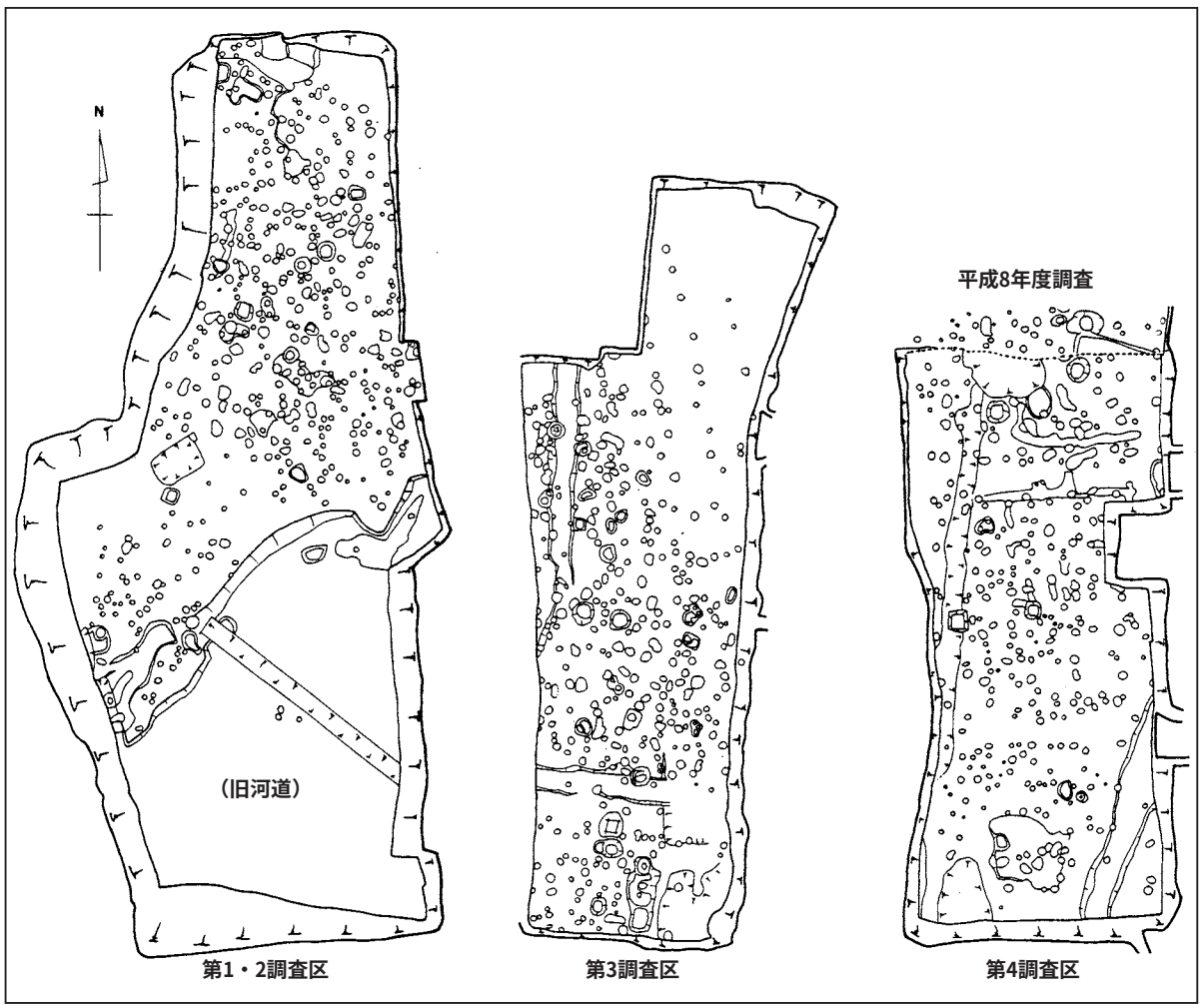
中世における南黒丸遺跡の性格については、珠洲郡のほぼ全域を占めた九条家領若山庄の存在を視野に入れて考えていかなければならないだろう。５間×７間の比較的大型の掘立柱建物を含む建物群は、規模・建物数ともに本遺跡が単なる集落跡でないことを示しており、瓦の出土も、それなりの地位・財力を有していた人物の存在を想起させる。これらの点から、本遺跡はある時期若山庄庄家ないしはそれに類似する、在地経営の拠点であった可能性が高い。

また、豊富な珠洲焼の出土も本遺跡を特徴づけるものであり、これまで生産・流通の側面から論じられることの多かった珠洲焼の、消費物としての側面を解明していく上で好資料となろう。これまで

必ずしも明らかとはいえなかった珠洲の中世像を解き明かす上で、本遺跡は重要な糸口を提供するものと期待される。

なお、当事業に係る南黒丸遺跡の発掘調査は、今年度の調査をもって終了した。　（和田）

遺跡遠景
（東より）

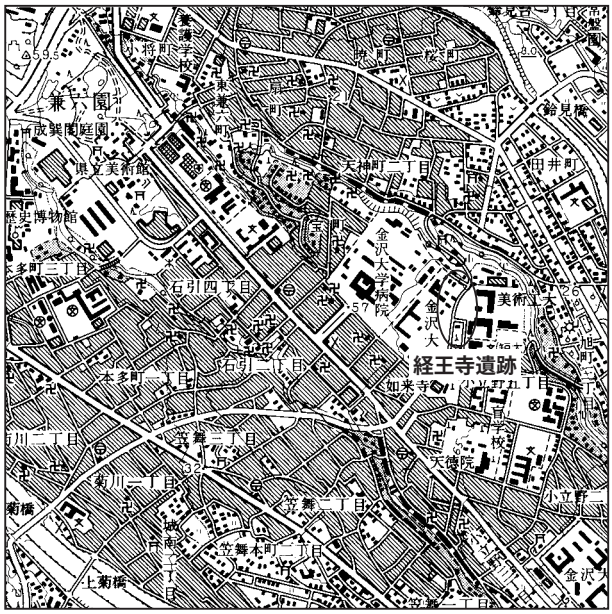


南黒丸遺跡　遺構図（S=1/400）

8　経王寺遺跡

所在地　金沢市小立野5丁目・宝町地内　　調査期間　平成10年5月6日～平成10年9月25日

調査面積　1,600m²　　調査担当　垣内光次郎　菅野美香子



遺跡位置図（S=1/25,000）

経王寺遺跡は金沢市内を貫流する犀川と浅野川に挟まれた小立野台地上、標高約60mに立地する。江戸時代初めに創建された日蓮宗経王寺の旧境内と推定されている。本調査は主要地方道路小立野・鈴見線緊急道路整備事業に伴うもので、２年目の調査となる。前年度の調査では、経王寺の旧墓地跡、明治時代の道路跡などが確認されている。今年度は東側の第４調査区と西側の第５調査区、合計約1,600mの調査を行った。

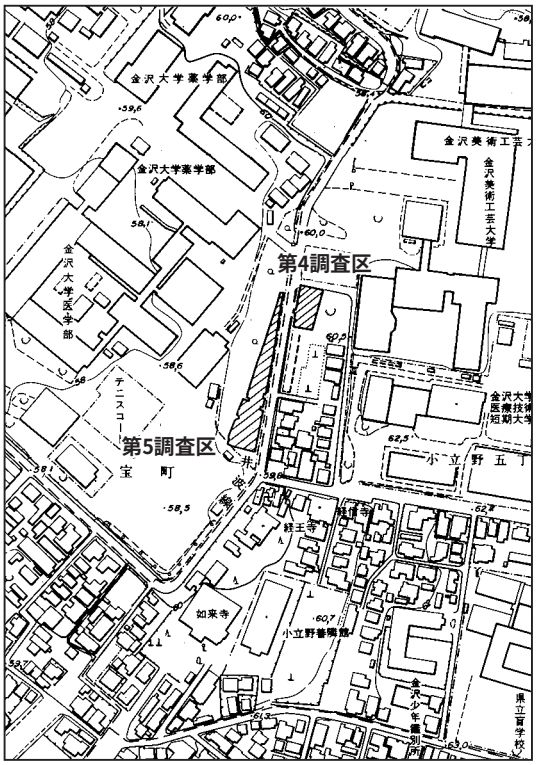
東側の第４調査区では、塚を含む約500m²を調査対象とした。塚はL字状の平面形を呈し、南壁底辺約11m、西壁底辺約14m、高さ約３mを測り、側面形は台形をなしていた。調査の結果、東方向の突出部の盛土は近年新たに付け加えられていると判明した。

塚の盛土を除去したところ、基底面に敷かれた砂層を検出し、さらにその下から規則的な位置関係をもつ江戸時代前期の遺構群を検出した。遺構群の中央に位置する土坑は約３m（約１丈）の方形をなし、炭化物や灰、被熱した飾り金具が出土した。周囲には土坑を二重に囲む形で大型の柱穴やピットが方形に巡る。内側は約６m（約２丈）四方で、四隅に角柱を設置したとみられる柱穴を検出した。各柱穴間には、柱と柱をつなぐものを敷設した痕跡をもつ溝状の遺構を確認した。外側のピット群は、約９m（約３丈）四方であり、一辺に４基のピットが並び、丸木が埋置されていたことが柱痕より確認できた。

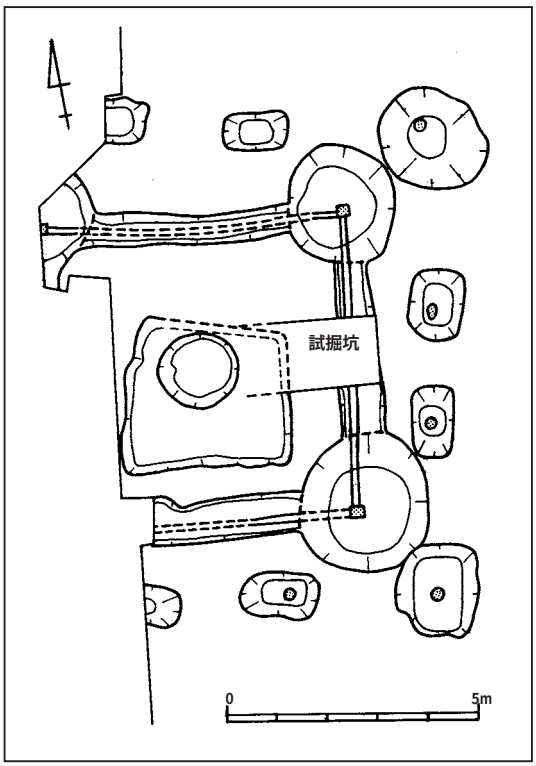
これらの遺構群は火を受けていることから、荼毘に関連したものと考えられる。つまり中心の土坑は荼毘坑で、周囲の遺構は葬送儀礼の際に構築された火屋や柵などの建造物と推測される。そしてこの遺構群の上に構築された塚は、骨灰を荼毘坑に埋納し、盛土を行なった「灰塚」であると推定できる。また基底面の砂層は叩き締められていることから、盛土前に基盤の整地が行なわれたと判断できる。砂層の広がりと、荼毘関連遺構群の位置関係より、塚の基底面は一辺約21mの方形に復元できる。塚の北側では溝を１条検出しているが、塚の南側（前年度調査区）でも、対になる形で溝が１条確認されていることから、塚には約36m方形の周溝が付設されていた可能性が高い。

第４調査区では、他に近代の遺構と考えられる土坑・井戸などを検出した。

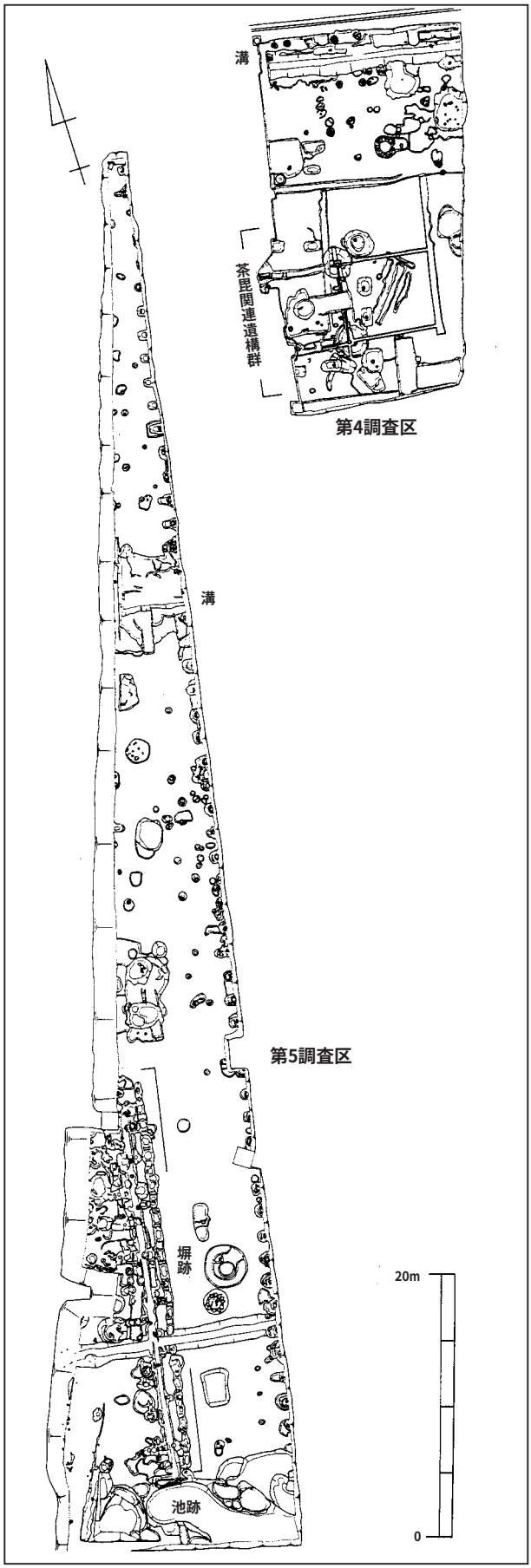
西側の第５調査区の調査面積は約1,100m²で、調査以前は金沢大学薬学部の薬草園であった。掘立柱建物跡２棟・井戸跡１基・塀跡３列・池跡１箇所・溝跡３条を検出した。調査区北部に検出した溝は、その位置より塚の南側の周溝に連続すると判断できる。調査区南部では、江戸時代後期に比定される瓢型の池跡や塀跡、井戸跡などが確認され、旧経王寺の境内の中でも裏庭的性格を持った空間と考えられる。（菅野）



調査区位置図（S=1/5,000）



第4調査区　茶毘関連遺構群平面図
（トーン部分は柱痕　S=1/150）



調査区全体図（S=1/500）

9　額谷遺跡

所在地　金沢市額谷町地内　　調査期間　平成10年4月30日～平成10年8月31日

調査面積　850m²　　調査担当　土屋宣雄　兼田康彦

当遺跡が所在する額谷（ぬかだに）町は、金沢市のベッドタウンのひとつを形成している大額や四十万等とともに同市南部に位置する。また町内を横断する旧白山街道は、近年では加賀産業開発道路への接続道としても機能している。そのため相当の交通量があり、当発掘調査はその状況の緩和を目的に行われる都市計画道路鈴見新庄線改築（街路）工事に起因するものである。

額谷町の中でも遺跡は富樫山地北西麓の果樹園や畑としての利用が多い緩傾斜地（調査区内での標高は63m～68m代）に立地する。このため金沢、野々市、松任などの平野部を眼下に望むことができる。今回の調査以前には平成7年度に調査が行われており、弥生時代後期後半～終末に属する竪穴系建物10棟、掘立柱建物8棟、近世末期～近代初頭の火葬遺構等が確認されている。特筆すべきものとしては2回の建替えが想定されている特大型の円形プランの竪穴系建物がある。（石川県立埋蔵文化財センター　1998　『金沢市額谷遺跡』）

遺跡位置図（S=1/25,000）

今年度の調査区は平成7年度調査区の東側にあたり、周囲同様果樹園として利用されていた。

そのため果樹根跡や散水用の水道管埋設溝による攪乱が遺構上部にまで及んでいたものの、他の部分の遺存状況は比較的良好であった。

調査の結果、遺構では弥生時代後期後半～古墳時代初頭と推定される竪穴系建物5棟以上、掘立柱建物7棟以上、土坑約15基、溝状遺構及びピット多数が検出された。また遺物としては弥生土器、土師器等が出土した。

まず竪穴系建物は、調査区北東部に位置するSI2001が他の遺構に比べ後世の削平の度合いが低く、壁の立ち上がりが確認された。外周溝を伴うこの建物は、隅丸方形のプランで4本主柱と想定できる。また調査区の北西部の一角には3棟の竪穴系建物が重なっており、切り合い関係から西側から東側へ変遷している。各建物の構造をみると、西側の建物SI2002はSD2013を外周溝として伴い、壁周溝の形状より隅丸方形のプランで4本主柱と推定される。中央に位置する建物は、壁周溝がSD2014、外周溝がSD2012（両周溝とも図上ドット）と考えられ、壁周溝の形状から円形か多角形のプランで5本主柱の可能性があ

調査区全景（南西から）

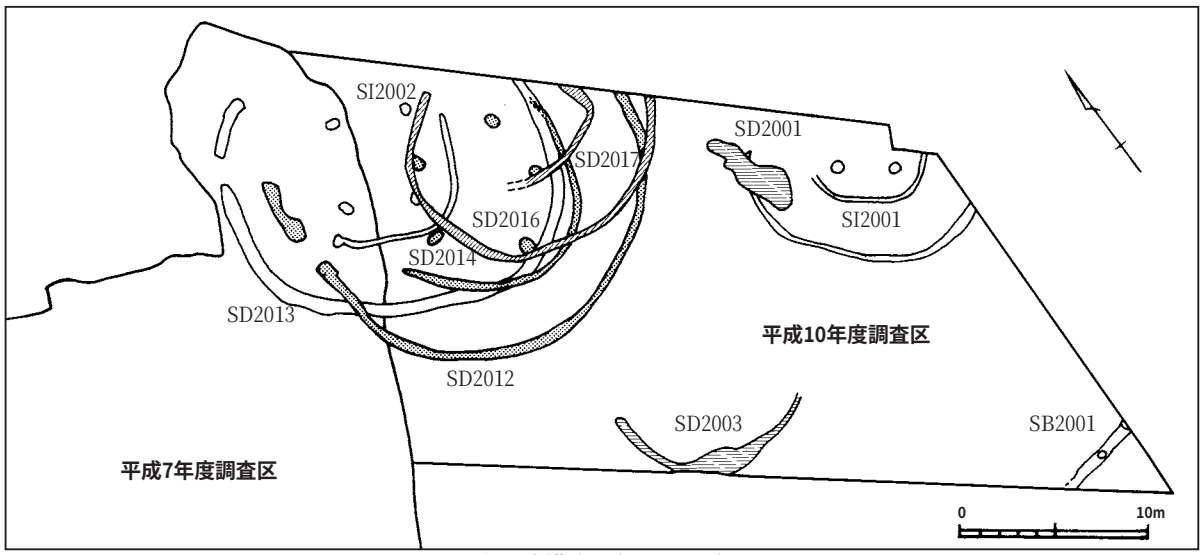
る。東側の建物は、SD2016（図上斜線）が外周溝と考えられる。壁周溝はSD2017の可能性も考えられるが、明確ではないため平面プランは不明である。主柱の配置も同様である。

また掘立柱建物は規模等は不明であるが、調査区南東部において少なくとも片側の桁が布掘の構造と考えられるもの（SB2001）等が検出された。同様の建物は平成7年度の調査でも確認されており、北側のみに布掘を持つ構造で、規模は1×3間で床面積は約20m²である。

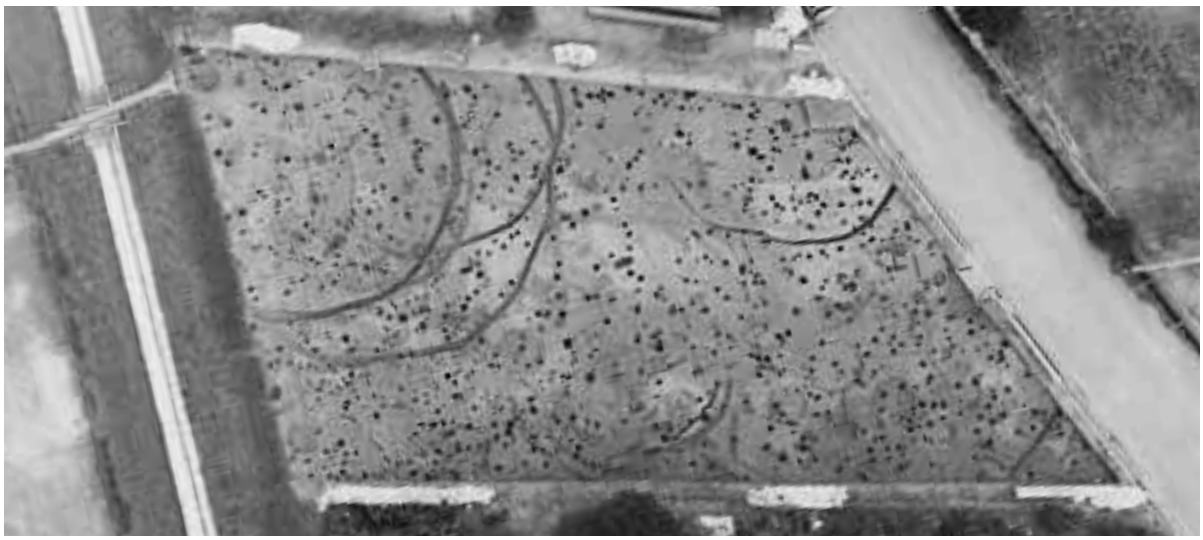
その他では、調査区中央付近の南北において検出された溝状遺構SD2001・SD2003（両遺構とも図上横線）から古墳時代初頭の土師器が出土している。

以上主要遺構の概要に触れたが、今年度の調査成果としては壁の立ち上がりを残した竪穴系建物の検出により、平成7年度調査において外周溝や主柱等の配置から想定されていた建物の規模や構造を確認する具体的資料を得られたこと、及び古墳時代初頭の土師器を伴う溝状遺構の検出により集落の古墳時代初頭までの存続が明らかになったことである。

なお今後平成7年度調査の成果並びに、出土遺物を含めた資料整理作業を通し、集落構造とその変遷過程について検討していきたい。（兼田）



主要遺構略図（S=1/400）



調査区完掘状況

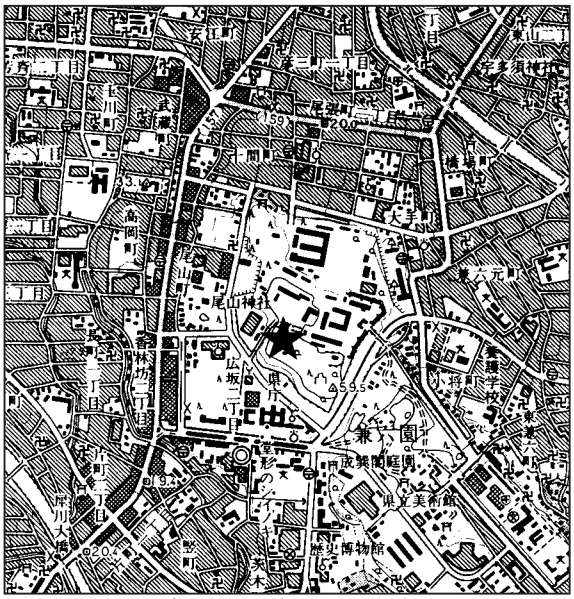
１０　金沢城跡（本丸附段調査区）

所 在 地　金沢市丸の内地内

調査面積　500m²

調査期間　平成10年5月18日～平成10年8月12日

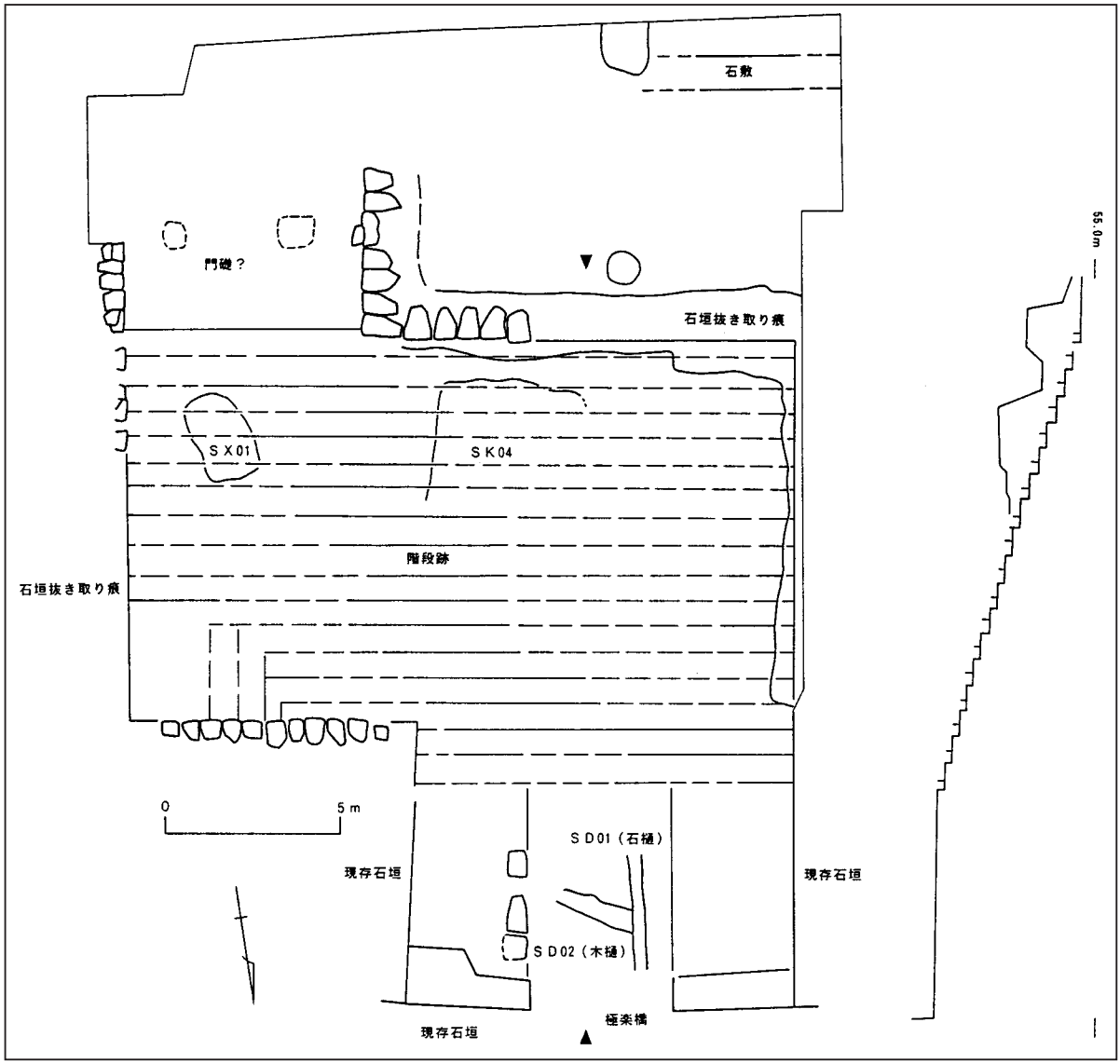
調査担当　滝川重徳　熊谷葉月　土田友信


兼六園
成巽閣庭園
県立美術館
歴史博物館
尾山神社
県庁
広坂一丁目
長町
武蔵
七川
森岡町
寺町
大手町
東山一丁目
玄門町
丁目
横町
東兼六町
東山
多須神社
尾張町
丁目
丁目
丁目

あった可能性がある。この西側には階段に付随する小郭があり、南辺の区画施設の基礎とみられる石敷が部分的に認められる。階段最下部、極楽橋詰付近では、凝灰岩切石組の石桶と木桶（痕跡のみ）が検出されており、排水溝と考えられる。

階段の築造時期は、上部盛土やその下位出土の遺物の年代から、17世紀前半頃と推測している。上部盛土の下面については、部分的な調査に留めたものの、先行する遺構の存在を確認できた。このうちSK04としたものは、幅・奥行きとも約４mにわたり斜面を掘り込んだ、切り岸状を呈する遺構であり、その東約５mには、落ち込み状のSX01がある。更にこの間に、地山を削平した階段状遺構が認められた。以上から、当該斜面には幅の狭い通路が先行して存在しており、17世紀前半のある時点で、盛土造成を含む大改修が行われ、城内最大級の階段に整備されたことが推察される。その契機としては、初期金沢城の構造を大きく変容させるに至った、寛永８年（1631）の大火が有力視されよう。

（滝川）

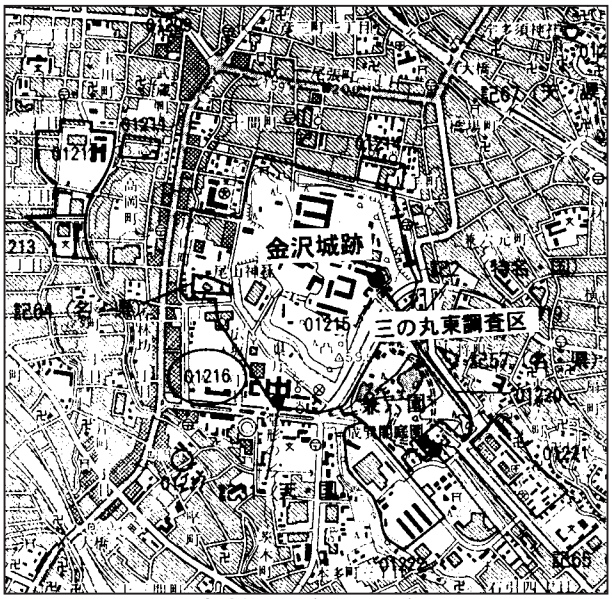


遺構配置略図（S=1/200）

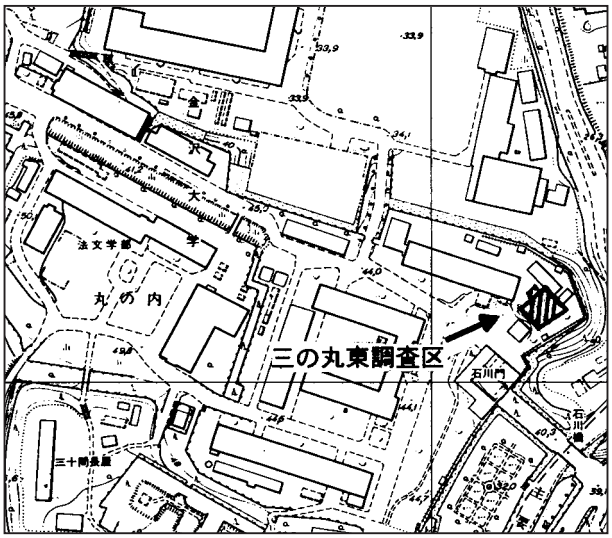
１１　金沢城跡（三の丸東調査区）

所在地　金沢市丸の内地内　　**調査期間**　平成10年5月6日～平成10年8月31日

調査面積　350m²　　**調査担当**　滝川重徳　熊谷葉月　土田友信



遺跡位置図（1/25,000）



調査区位置図（1/5,000）

出土した火縄銃部品（中央の銃は伝世品）

当調査区は、石川門から城内に入ってすぐの三の丸の東北隅の地点で、現在の守衛室の裏手にあたる。城址公園整備事業のトイレ建設に伴い調査が実施された。

地表面から約1.5m下で、鍛冶工房であると思われる礎石立建物跡１棟とその関連遺構を確認した。建物跡は３間×２間（5.4m×3.6m）で、調査区外の北西方向へのび、母屋部分にとりつく形になるものと考えられる。建物跡のほぼ中心には、瓦を組み合わせた構築物がある。丸瓦を筒状に組み合わせ、玉縁部分を水平に置いた磚瓦の上にのせている。その隣には木枠痕の残る溝状遺構が存在する。位置関係などから瓦組み遺構は鍛冶炉、溝状遺構は鞴などの可能性が考えられるが確定できない。建物跡地下は、防湿を目的とした念入りな地盤改良地業を行っている。深さ１m近く掘りこみ、河原石を入れ、粘土を厚く敷いている。中心遺構の周辺では、さらに瓦を平らに置き、一度砕いた橙褐色の焼土を敷いて床面としている。床の上面は細かい炭化物で覆われ、火を受けて溶着した火縄銃の部品、鉄製の銃身を再鍛錬した際に生じたと思われる鍛造剥片、鉛などの鉱滓が散らばっていた。建物跡の周囲からは、鍛造剥片や火縄銃部品を大量に廃棄した小穴（P.1）、水溜跡と思われる方形石組遺構建物敷地を画する石列などが検出されている。

火縄銃の部品は、目当（照準器）、火蓋、引き金、カラクリ（発射装置）の部品、鋲類など様々であるが、種類によって数にばらつきがある。また鍛造剥片の中には、文字が左右逆に浮き彫りになり、「國」「助」「住」「金沢」と判読できるものがある。銃身に刻まれていた銘が写った可能性が考えられる。

これらの遺構の年代は、床下に敷かれた瓦（施釉赤瓦）や方形石組遺構出土の陶磁器類からみて、江戸時代末期頃のものと考えられる。

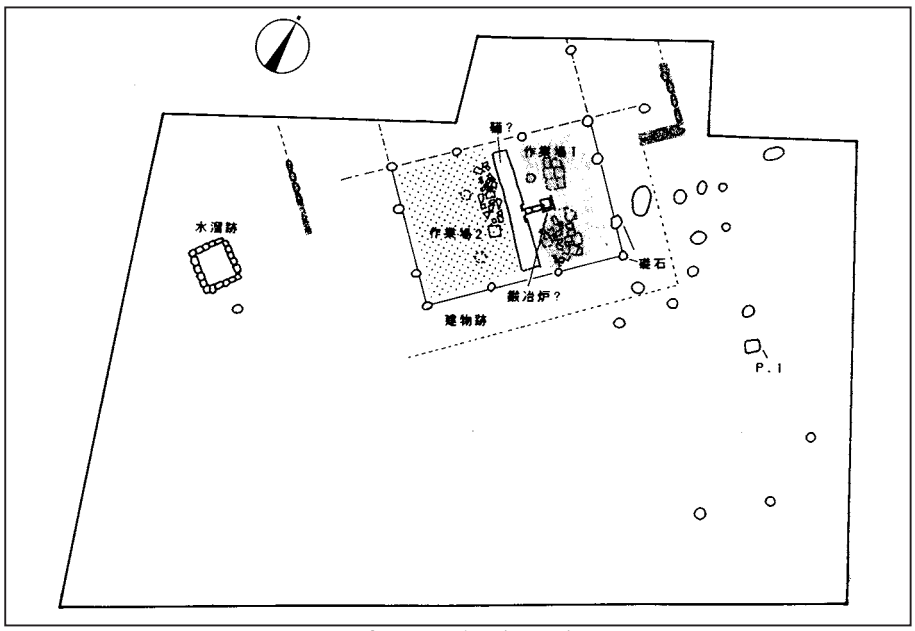
調査区を含む三の丸北部の一角は、城内を描いた古絵図や古文献によると、江戸時代前期より一貫して「鉄炮所」、「鉄炮掃除所」など鉄砲に関係する施設が存在するが、絵図に描かれた建物の中で今回検出のものと平面プランや年代が一致するものはない。礎石や抜き取り痕跡が床面下から検出されるなど立て替えが何度も行われたようであり、また調査区の南半の一帯では、建物跡以前の盛土にも炉壁の可能性のある焼土塊や鉛加工の白色の鉱滓が大量に混入している。検出遺構の操業以前にも火を使って何らかの加工を行う施設が存在したことをうかがわせる。

遺構の性格として、城内の一角という位置環境や出土部品の種類の偏り、幕末という時代的背景などから見て、様々な素材から火縄銃を製造していたというよりも修理や簡単な加工を行っていた施設であった可能性が高いと考えている。加賀藩では時勢に備え、幕末に火縄銃を洋式に改造することが行われた記録があり、このことを考えあわせると興味深い。

調査例の少ない近世城郭内での鍛冶遺構であり、火縄銃の加工関連施設としては初めての貴重な資料である。建物遺構部分は埋め戻しの上、保存されることになった。（熊谷）

建物跡　（鍛冶工房跡）（北から）

瓦組み遺構（鍛冶炉）



調査区平面略図（1/200）

１２　梅田B遺跡（新幹線Ｉ－A区）

所在地　金沢市梅田町地内　　**調査期間　平成10年5月6日～平成10年7月14日**

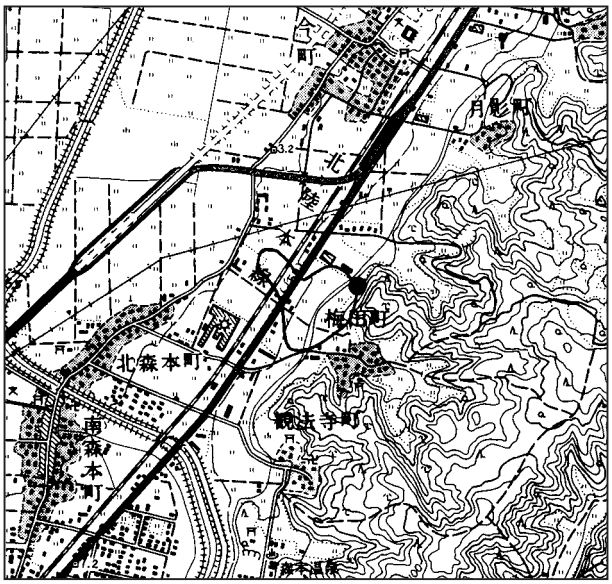
調査面積　1,000m²　　**調査担当　松山和彦　湯川善一**

本遺跡は、河北潟南東の低湿地に臨む丘陵裾部に位置し、当該調査区は遺跡北東端部を占める。標高は10m～12mを測る。以下、各時代ごとに概要を述べる。

古墳時代前期については、明確な遺構を把握することはできなかった。ただし、調査区北側の谷部より、ややまとまった量の土師器が出土している。出土地点の東側には湧水ポイントがあり、水辺の祭祀に関わるものとも想像される。

古墳時代中期では、外周溝をもつ一辺7mの竪穴住居１棟（SI01）・土坑１基（SK02）などの遺構を検出した。遺物は、SI01と北側の谷部からその多くが出土している。中でも脚付きの土師器鉢は、県内には類例が少なく注目される。これらは、出土遺物中に須恵器を含まないことなどから、5世紀前半の所産と考えられる。

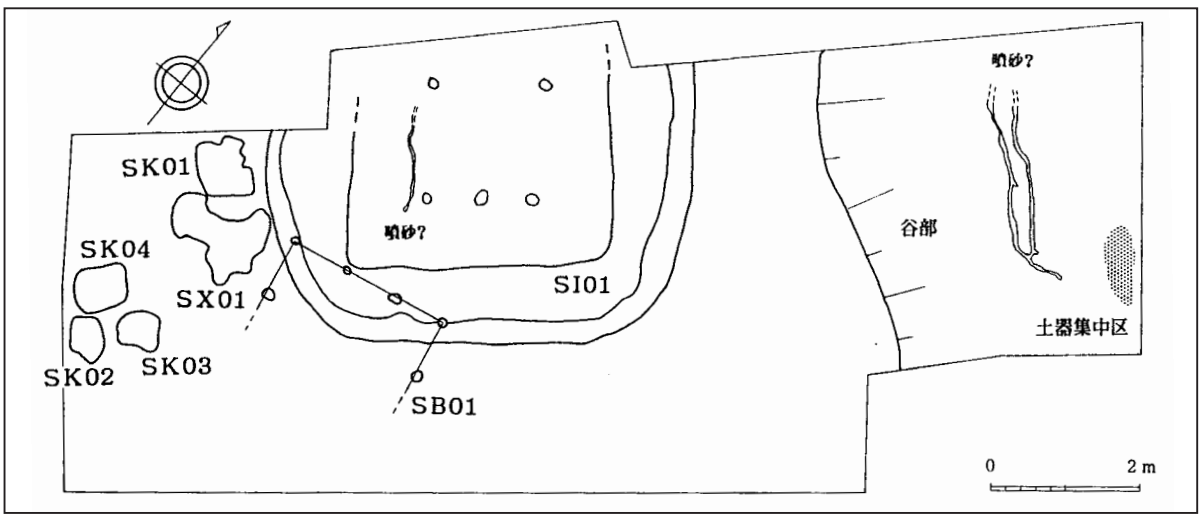
平安時代前期では、土坑及び掘立柱建物を構成すると考えられる小穴が多数検出され、調査区が集落建物群の一画を占めることが明らかとなった。遺物は、須恵器・土師器を中心に砥石や竈の裾石なども出土している。これらの遺構・遺物は調査区の東南に偏っており、集落域はさらに広がるものと考えられる。



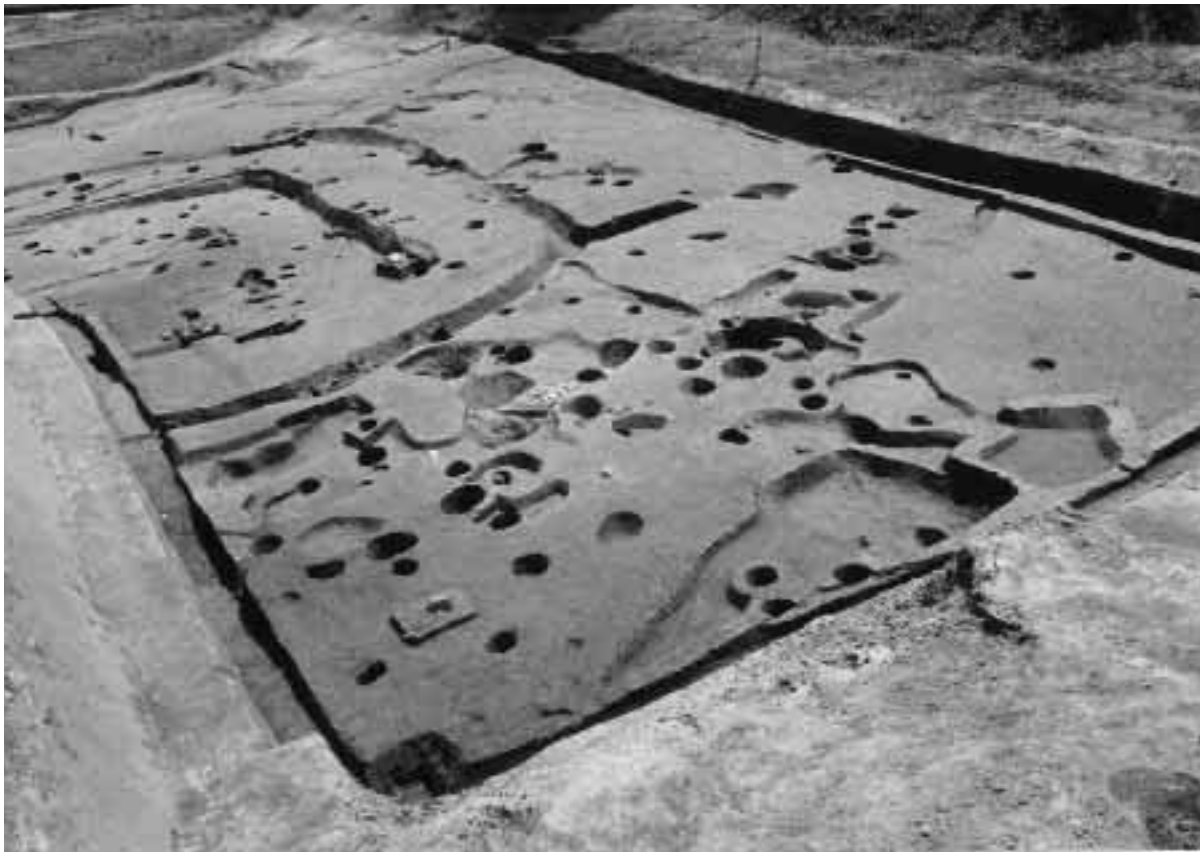
遺跡位置図(1/25,000)

中世では、掘立柱建物1棟（SB01）を検出した。全容は不明だが３間×２間以上となろう。遺物は、14世紀前半と考えられるかわらけが柱穴周辺から２～３枚重ねた状態で出土している。

また、時期は不明であるが、北側の谷部とSI01から噴砂らしきものを検出した。これらは下から砂が噴出しておらず、地割れに上から砂が流れ込んだ可能性もある。いずれにせよ、近接する森本断層との関連が予想される。（湯川）



調査区全体図



調査区完掘状況（西から）

SI01完掘状況（東から）

戸水B遺跡（第12次調査）の堅果類を出す土坑について

本田秀生

今年度調査を実施した戸水B遺跡第12次調査では、数多くの土坑が検出された。その幾つかで、トチの実、ドングリなどが出土し、その土坑が堅果類の貯蔵穴であったと判断できた。それは、弥生時代にあっても堅果類の貯蔵が盛んであったことを裏付けるものとして評価できる。これらの例を通し堅果類の貯蔵穴について少し考えてみたい。

戸水B遺跡は、標高３m前後の低地に立地する弥生時代中期末の集落遺跡である。ベースの土壌は砂、シルト、粘土が互層を成し、50cm程の深さからは湧水が著しい。また、１m程下部には未分解の腐植物を含む層があり、深い遺構では径30～50cm程の樹幹や根株に遭遇することがあった。付近では同じ様な状態が広がっていると見え、隣接する戸水B遺跡第11次調査区や100m程南で展開する藤江C遺跡でも深度は異なるが、同じ様に樹幹や根株に遭遇している。

第12次調査では平地式建物、布堀式建物、井戸、溝、土坑などが確認され、これまでの調査成果からすれば、集落南側の様相が一部明らかになったと言える。土坑は単独で存在するものもあるが、他の遺構と重複しているものも多い。土坑の形状や規模は様々であるが、堅果類を出土したものはどれも湧水層まで掘り込まれている。覆土は、他の遺構（柱穴を除く）と大きく変わらないが、堅果類を出土する土坑は、覆土下部に灰色の粘土や砂が堆積し、坑底に至るまでに腐植物層を挟む例も見られた。

堅果類は覆土下部付近から出土するが、坑底にめり込むような形で見つかるものも少なくない。坑底まで掘りきったかなと思う頃から堅果類が顔を出すという印象があった。このことから、当初は前述の腐植物層に含まれるのではないかとの考えもあったが、ある土坑を立ち割ってみた結果、土坑の範囲以外からトチの実の出土はなく、まぎれもなくこの土坑に入れられていたものと判断できた。

筆者は採集したクルミやガヤを、小さな穴を掘りこれに埋めておいたことがある。２～４週間ほど後にこれを掘り出して腐った外皮を洗い流すのであるが、必ずと言っていいほど取り残しがでる。トチの実や、ドングリの場合は外皮を腐らせる必要がないので、穴に埋める目的は異なるのであろうが、回収に関しては同じ様なことが起こっていると思われる。

これら堅果類を出す土坑は、堅果類のみを出土するわけではない。SK011ではトチの実の出土層より上位で大きな板材や皮付きの丸太などが出土している。SK049では覆土下部まで土器が多量に出土したが、トチの実は坑底にめり込んだような状態で数点出土した。これらの例からすれば、堅果類を貯蔵した土坑は、それらが取り出された後、別の用途で再利用されることもあると考えらる。

土坑から出土した堅果類はトチの実、ドングリ、クルミがある。ドングリはコナラかミズナラと思われるが、SK035で栃と一緒に５点出土したに過ぎない。また、クルミはオニグルミでSK053で1点、SK072で８点出土したにとどまる。これらに比べ、トチの実を出す土坑は多く、また、量も多い。SK089で50リットル以上出土したのが最多で、40点前後出土した土坑が４基、数点出土した土坑が３基ある。一応、トチの利用度が高かったと評価しておく。

これらは、民俗例でその採集、貯蔵、食物利用の方法が良く知られている(註1)。クルミは一般的に果皮除去後、殻付きのまま乾燥貯蔵する方法が知られている。土中に埋めるのは果皮を除去するときのみである。SK072での出土例は、前述したような果皮除去の際の取り残しを想定させるものである。トチの実は虫だしをした後、乾燥貯蔵する方法と土坑貯蔵の方法が知られている。土坑貯蔵はトチの

実を生のまま貯蔵するのが目的とされている。この土坑は一般に畑の一角などに設けられ、調査で検出されたような湿地に設けた例は確認できなかった。ドングリは虫だし[2]の後、乾燥貯蔵する方法が一般に知られているが、江戸時代の貯蔵穴、対馬厳原町豆酘の樫ぼのという樫の実を水漬けにして保存する施設の発掘調査報告がなされている（立平　1992）。これによれば樫ぼのは川に沿って石積みで構築し、坑底は河床より低く設定されているという。

この例からすれば戸水B遺跡の堅果類を出す土坑も樫ぼのの様な堅果類の水漬け保存施設で、乾燥貯蔵に対して生貯蔵を目的とするものであろう。しかし、クリは土中保存で甘みが増すといった話や、発酵によるアク抜き法などもあり、生のまま保存するという主目的以外に副次的な効果や失われてしまった技術があったのかもしれない[3]。いずれにしても、この土坑貯蔵は長期保存を目的としたものではない。救荒食の様な長期貯蔵を目的にするのであれば、乾燥保存が圧倒的優位であることは民俗例が示しているし、発掘例でも乾燥保存を窺わせる資料がある。堅果類の土坑貯蔵は、貯蔵後の利用を射程におき、利用しやすい状態を維持する、あるいは作り出す事を主目的とした短期間貯蔵と言えよう。また、それはその時点での堅果類の頻繁な利用状況を窺わせる資料として評価できるのではないだろうか。

註

1）橘　礼吉　1989「白山麓の焼畑地域における堅果類の食物利用　―石川県白峰村の木の実食（トチ・クリ・ナラ）慣行―」『石川県立歴史博物館紀要』2　石川県歴史博物館、畠山　剛　1997『新版縄文人の末裔たち』彩流社、渡辺　誠　1975『縄文時代の植物食』雄山閣など

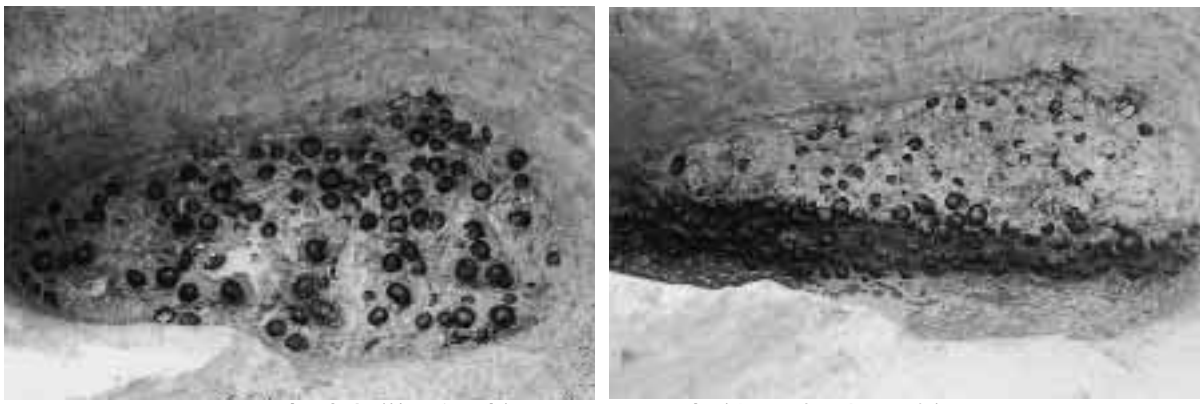
2）トチは水につけ虫出しをする方法が知られている。また、韓国にはドングリ類を水につけ虫出しをする例がある（辻　稜三　1985）。

3）韓国ではドングリ類を河床に沈め保存する事例がある（辻　稜三　前掲）。また、渓流の淵に偶然たまったクリを採集して食べるととても甘いという話を伊藤常次郎氏よりうかがった。

参考文献

辻　稜三　1985「韓国におけるドングリの加工と貯蔵に関する研究」『季刊人類学』16―4
京都大学人類学研究会

立平　進　1992「近世堅果類の貯蔵施設「樫ぼの」遺構について」
『人間・遺跡・遺物―わが考古学論集2―』発掘者談話会



戸水B遺跡（第12次調査）SK089のトチの実（上面―左と断面―右）

［発掘余話］金沢城跡五十間長屋出土の「鍬始」刻石

北 野 博 司

1　刻石の発見

石垣解体調査が始まって間もない1998年11月６日の午後４時頃、ある作業員が最上段の北東角石の裏側の栗石を掃除していて、明らかに他とは違う四角い切石を発見した。表面をきれいにすると彫りもあざやかな文字が刻まれていた。直ちに近くにいた調査員が呼ばれた。

「宝暦十三癸未年 鍬始 六月廿五日」

文字を見た調査員が興奮を隠しきれなかったことは言うまでもない。私はその日の夕方に現場へ行った。調査員らと今日の調査成果や今後の課題などを話し合おうとしていたところへ、某新聞社の記者が訪ねてきたため現場を案内していたが、その最中にもいつもの疲労感の漂う夕刻の現場の雰囲気と違うものを感じていた。対応を終えて現場事務所へ帰ろうとしたとき、呼び止められ刻石発見の事実を知った。５時半を過ぎて急にあたりが暗くなってきたが、石垣解体工事の石工さんたちと刻石を取り囲んでしばらく興奮の余韻に浸っていた。

2　なぜ「宝暦十三年」なんだ!!

しかし、調査員の第一印象は一様に「なぜだ!!」。というのは、我々は調査当初からある仮説を立てていた。五十間長屋台石垣の上部は、江戸後期（19世紀）の積み替えではないか、と考えていた。

金沢城跡は文化五年（1808）に二の丸を中心とした大火があり、五十間長屋の石垣も大きな被害を受けた。この時、橋爪門続櫓の石垣が修築された記録が残っている。安政年間には二度の大地震があり、城内各所で石垣が破損した。また、記録に現れない修築もあろうと考えていた。一方、五十間長屋台石垣の内部の掘り下げ調査を始めてまもなく、釉薬瓦が出土することが目に留まった。これに対して、金沢城跡では釉薬瓦の初現は江戸後期を遡らないのではという先入観めいたものがあった。

文化五年の石垣修理記事と釉薬瓦の二点から、漠然とではあるが五十間長屋上部は文化五年の修築ではないかと考えるようになっていた。そこへもってきての「宝暦十三年（1763）」である。

「鍬初めの刻石が石垣の最上部にあるのはおかしい。」「江戸後期の解体中に出土し、その際に最上部に改めて置いたのではないか。」さまざまな解釈が話し合われた。

3　えっ?「鋤始」

ところで、刻石は２個あった。年号、月日が全く同じ「鍬始」の刻石が２個並んでいる。夕闇の中で見ていたこともあり、さほど不思議にも思わなかった。とりあえず、ポラロイド写真を撮って埋文センターへ帰った。

センターで写真を前にあれこれ話しているうちに、ひとりが気づいた。一方の刻石を指して、「あれっ、これ“鋤”とちがう？」２つは同文ではなく「鍬始」と「鋤始」が対になっていたのだ。そういえば、今日の朝刊に能登空港着工の安全祈願祭で代議士や知事が「カマ入れ」「クワ入れ」「スキ入れ」をやったという記事が載っていた。「鍬」と「鋤」はそういうものか、なんとなく納得した。

4　「鍬」と「鋤」と

現場ではそれから刻石周辺の精査や実測、写真撮影が行われ、数日後に取り上げが行われた。ここでまたもや唖然とすることが起こった。手前にある「鍬始」の刻石を取り上げ、裏についた土をはら

うとそこにも小さい文字があった。よく見ると「鋤」と読める。調査員が目を疑い、もう一度表を見た。表は「鍬」に間違いない。調査員はニヤリとして、次の「鋤始」刻石を取り上げにかかった。裏にかえした。「やはり！」とうなづく。そこには予想通り「鍬始」と刻まれていた。「冗談キツーッ。」

この一部始終は、調査状況を撮影に来ていた埋文センター企画課職員がビデオテープに収めた。貴重な映像である。

5　記者発表に向けて

金沢城跡は県都金沢の礎を築いた藩主前田家の居城であり、藩政の中枢部である。城址公園整備のあり方などとも絡んで県民の関心は非常に高い。発掘調査現場にはマスコミや見学者が訪れることが多い。その対応にあたるのは調査員であり、調査成果があればこれをまとめて記者発表するのも調査員の大事な仕事である。

今年度の調査では、6月に全国初の鉄砲鍛冶遺構の検出、10月には築城初期の新たな堀と土橋の発見でそれぞれ記者発表を行ってきた。今回も誰が言うともなく記者発表が近いことを感じ、資料の探索が始まった。『金沢城郭史料［後藤家文書］』（石川県図書館協会）、『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ』（県教委）、『金沢城跡』（県教委）、『金沢城』（県歴史博物館）が手近にあるバイブルである。

6　史料調査はじまる

実は春先の「御鉄炮所」の発掘の時もそうだったが、調査前から事前によく絵図を調べていれば、そこで鉄砲鍛冶遺構が発見される可能性は十分予測できた。と、後になって思う。調査区の場所が鉄砲関係の役所の「鉄炮掃除所」「摩所」「細工所」と記載される場所にあたっていたからだ。

今回も、史料を調べはじめてすぐに宝暦十三年（1763）に五十間長屋の石垣が修築された記録のあることが分かった。宝暦の大火（1759）のすぐ後である。なぜ「鍬始」なのに竣工時に置くような位置から出土したのか、釉薬瓦はこの時期まで遡るのか、の問題を除けば、素直に古文書のとおり解釈すればよいということになる。菱櫓側の石垣内部の栗石に混じって見られる焼土層を宝暦の大火に伴うものとすれば、それを切って作られている五十間長屋側の石垣が宝暦十三年の修築ということで矛盾はない。菱櫓～五十間長屋～橋爪門続櫓の石垣の修築過程は、解体調査が進めば、遺構の上から自ずと明らかにできるはずであり、深くこだわる必要はない。

焦点は、「鍬始とはなんぞや」というところに移っていった。まず、国語辞典の類からはじまり、『石垣普請』（北垣聰一郎著）などを読んでいくうちに、土木工事の起工式にあたること、一般には「始」ではなく「初」の文字を用いること、石垣普請の際にはセレモニーとしてかなり早くから行われていたことが分かってきた。そして、加賀藩の穴生職（石垣普請を担当する職）を代表する後藤家に伝わる「後藤家文書」にも「鍬始」のことが記載されていることを知った。

7　「後藤家文書」との格闘

いよいよ、分厚い『金沢城郭史料』を開く時が来た。古文書を読むのはできれば避けたいと思っていた。昔から古典や漢文の類は苦手である。目が漢字の海を溺れそうになりながら泳いでいる自分に、これまでの不勉強を反省してももう遅い。あきらめの気持ちで漢字の意味を追いかけ始めた。

しかし、ここまではまだ良かった。この後、宝暦十三年の五十間長屋石垣修築に関わるある人物の姿がクローズアップされるに至り、すっかり泥沼にはまり込んでしまうのであった。この時点ではまだ知る由もない。

（以下は次号につづく）

宝暦十三年定銀御達始且御押之留

御石垣御普請、当時五拾間下御石垣御修復取懸居申候所、先日半減ニ仕候様被仰渡候ニ付、先人懸方相減ジ置申候。（中略）

未八月　菊池弥四郎　山崎小右衛門　羽田伝太夫

本多安房守殿
前田駿河守殿

「文禄年中以来等之旧記」

宝暦九年四月　御城御焼失同十年ゟ安永年中迄御石垣積直御出来之ケ所積方等善悪之事

一宝暦十年橋爪足軽番所横切合御石垣繕リ、同十年ゟ河北御門台両方積直十一年出来、同十二年五拾間御長屋下石垣崩御普請同十三年出来。（後略）

「高石垣等之事」

五十間長屋の石垣修築を伝える古文書（『金沢城郭史料』より）

金沢城

宝暦十三年「鍬始」くっきり

起工式示す初の刻石

江戸時代、加賀百万石の拠点だった金沢市丸の内の金沢城の跡地から、一七六三年（宝暦十三）に「鍬初め」を行ったことを示した刻石が出土した。鍬初めは当時の土木工事の起工式とされ、古文書などに記述が残っているが、具体的な物証の出土は全国初という。

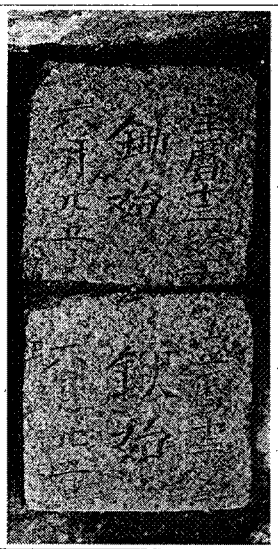
刻石は、金沢城の二の丸跡の東側に位置し、倉庫として利用されていた五十間長屋の石垣最上部で二個見つかった。いずれも戸室石（赤石）で、一辺十六㌢の立方体。重さ七・五㌔で縦に並んでいた。

一方は、表に「宝暦十三癸未年　鍬始　六月廿五日」、裏に「鋤始」と刻まれ、もう片方は「鍬始」と「鋤始」の文字が入れ換わっていた。

金沢城は一七五九年（宝暦九）四月に大火に見舞われたとされる。その際、ほとんどの建物が焼失し石垣が壊れたが、刻石は、この石垣の修復工事の鍬初めを記録するため作られたらしい。

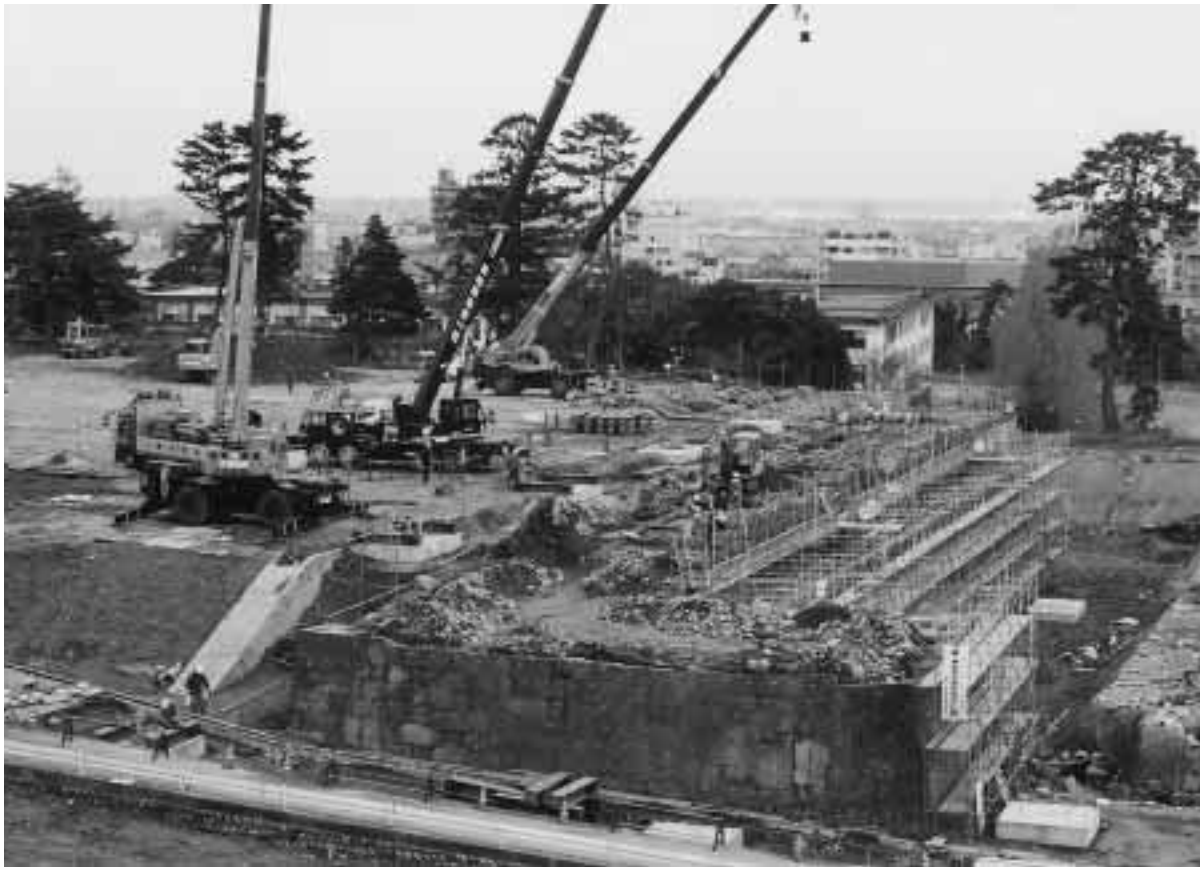
古文書には、当時、加賀藩で石垣工事を担当した正木家が、宝暦年間に大掛かりな鍬初めを行って藩主から拝領物を受けた記録も残っている。

発掘調査にあたった石川県埋蔵文化財センターは「儀式を重んじる加賀藩が大火からの復興を記念して刻石を作ったのではないか」と話している。



金沢城の石垣から発見された「鍬始」の刻石

刻石発見の新聞記事（読売新聞H10.12.10朝刊）



「菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台」の石垣解体調査風景

刻石の出土状況（五十間長屋北東隅）

現場事務所での記者発表風景

「宝暦十三年鍬始」刻石

九　　泉

滝川重徳・田村昌宏・柿田祐司

1．はじめに

「野田山へ行こう」を合い言葉として結成されたこの研究グループは、実際に墓を見て歩くことを活動内容の中心の一つにしている。これまでに富山・福井で活動を行っている。富山では長岡墓地、黒川上山古墓、福井では平泉寺墓地を見て歩いている。また当グループの中心となる３人衆はそれぞれ異なる視点を有し、依拠する分野も違っている。そこで、古代を柿田、中世を田村、近世を滝川が担当し、古代から近世までの墓を通観することも中心の一つとしている。将来的には当グループの成立のきっかけとなった野田山墓地について、その成立過程やあり方についても考えていければと思っている。それでは時代を追って、今我々がどんなことを思考しているのか見てもらいたい。

2．石川県における古代の墓研究の現状・課題

古代の墓といって思い起こされるのは、『古事記』の太安万侶の墓であろう。彼の墓は１辺２mの土坑の中に木炭を敷き、その上に火葬骨と真珠４つを入れた木櫃を入れ、さらに木炭で埋めるというものである。彼の墓であることが判明したのは、その中から銅板墓誌が見つかっていることからである。墓誌とは死者の事跡を記したものである。

さて、太安万侶墓のような墓が石川県で見つかっているかといえば、まだそのような報告はいっさいない。また北陸一円に範囲を広げてもそのようなものはない。古代の墓研究そのものが北陸ではまだまだ行われていない。今の段階では1995年に行われた第５回東日本埋蔵文化財研究会において作成された資料『東日本における奈良・平安時代の墓制』が最も纏まったものといえる。私はその資料作成に関わり石川県の状況を纏めたことがある。そのときの状態から私自身一歩も進んでいないが、当時の資料を基に、現在考えていることを若干述べてみたい。

まずこれから述べる古代の墓にはどんな種類があるのか考えてみよう。現在でも実際に墓の中になにもなくても「墓」としていることはいくらでもあることなのだが、発掘調査という限られた中ではこの魂の墓とでもいうものを見つけだすことはほとんど不可能である。また、火葬した骨を散骨するというものもあって、古代の墓すべてを明らかにすることは非常に難しい。『広辞苑』では墓といった場合「死者の遺骸や遺骨を葬った所」とある。ここでは遺骨が残っているもの、または状況証拠のあるものを墓と認識することにしよう。そうすると古代の墓には今のところ火葬墓、土坑墓、古墳・横穴墓への追葬といったものが考えられる。石川県においてはどれも確認できるが絶対量は少ない。墓の種類別に確認されている例をあげ、現在の状況について以下に述べよう。

長岡墓地を徘徊する

1）火葬墓

発掘調査によって得られている資料で、間違いなく火葬墓と考えられるものは、小松市河田山古墳群より出土したものである。骨蔵器に須恵器の甕を使用したものと、短頸壺を使用したものがある。いずれにも火葬骨が入っていた。短頸壺には無台杯で蓋がしてあり、門前町道下元町遺跡からも同じように無台杯で蓋をした短

頸壺が出土している。火葬骨は出土していないが、これも火葬墓の可能性をここで指摘しておきたい。

河田山古墳群より出土したものは明らかに古墳を意識しており、古墳被葬者との擬制的関係を意識していることは明らかである。道下元町遺跡より出土したものは低い河岸段丘上に位置しており、そのような意識は認められない。

羽咋市寺家遺跡には火葬骨が散らばって出土した部分がある。詳細はよくわからないが、大型の甕が共伴しておりこれを骨蔵器と考えることもできる。また、火葬墓ではなく大甕を使ったある種の祭りが行われた可能性もある。富来町倉垣丸山古墳でも火葬骨が検出されている。これについても骨蔵器は伴っていないようである。

その他単独で出土し、骨蔵器とされるものが数例確認されているが、そのどれもが和同開珎などの古銭を包蔵している。しかし、河田山古墳群の骨蔵器からは、和同開珎などは出土していない。よってこれらは、火葬墓ではなく地鎮祭祀などに伴うものという可能性も考えられる。

2）土坑墓

確実に土坑墓といえる例は今のところないというのが現状である。土坑墓と推定されているものには、辰口町宮竹うっしょやま遺跡・庄が屋敷B遺跡で検出されている焼土坑がある。これは炭を作る伏せ焼きに使われた土坑とも考えられているものだが、土坑の中で火葬を行いそのまま埋められたものと見られている。また、輪島市三井新保遺跡・金沢市三小牛ハバ遺跡では、円形ないし方形の土坑の中に礫を充填したような形で検出された遺構がある。これらの礫は焼けており、これも火葬した後埋められたものではないかと考えられる。

これら土坑墓の可能性を考えたものには、墓と確定できる遺物（骨片の出土など）の出土はない。その立地や周囲の状況等から墓と推定されているものである。土坑墓はその認定が難しいことから、平野部の遺跡で検出されている土坑の中にもその可能性のあるものは多数隠されていると考えられる。

3）古墳・横穴墓の再利用

追葬の事例を多く確認できるのは能登地域である。倉垣丸山古墳には火葬骨が石室内部から検出されており、追葬が行われた可能性が高い。他にも何例か見られるが、８・９世紀の土器などの遺物が石室の中や周辺で確認されることからの推定に過ぎない。横穴墓の追葬例には、今のところはっきりと奈良・平安時代に下るものは見られない。ただし、能登北部にはある可能性が高いと思われる。

4）加賀・能登の地域差

古代の墓で地域差を見られるような状況に現在はないが、７世紀後半に造られる古墳を見ると、石室に能登では自然石ないしは割石を使った横穴式石室が見られるのに対して、加賀では切石積みの横穴式石室、あるいは木芯粘土室といったものが見られる。また、能登地域では横穴墓が能登中部ではあまり造られないが、能登北部では盛んに造られるといった状況が見られる。７世紀後半代の様相が、奈良・平安時代の墓制にも少なからぬ影響を与えていることが予想できる。

5）課題

現在の石川県の状況を簡単に見てきたが、今後研究していく際の大きな問題の一つに、墓の検出例が非常に少ないということをやはりあげなければならない。これをただ確認事例が少ないと見るのか、墓のある場所を調査していないと見るのか、あるいは古代には墓はそれほど造られなかったかと見るのかでは大きな相違がある。私見としては、火葬墓はおそらくそれほど定着しなかったのではないかと考えている。むしろ土坑墓が主流であったと考えた方が適切だと思う。これらは今後発掘調査の段階で十分意識していけば解決するのではないかと期待している。

3．中世墓研究－これまでの軌跡－（能登編）

石川県における中世墓の研究は、櫻井甚一氏（故人）の石造遺物調査をはじめ古くから行われている。最近は中世墓の発掘事例も多くなり、県内にある関係資料も膨大な数となってきた。そこで、今回は中世墓を調べる上での取りかかりとして関連する文献を集成することにした。尚、掲載文献が大変多いため、能登編、加賀編と２回に分けて行う。また、平成６年までの中世墓の発掘事例による様相は「中世北陸の寺院と墓地」北陸中世土器研究会　1994が詳しい。

番号	執筆者名	発行年	遺跡名等	題名	書名	発行機関	備考
1	櫻井甚一	1978	珠洲市　伝平時忠一族の墓碑群		珠洲市史　第2巻資料編中世・寺院・歴史考古	珠洲市史編纂専門委員会	五輪塔（室町中期）
2	櫻井甚一	1978	珠洲市　高照寺		珠洲市史　第2巻資料編中世・寺院・歴史考古	珠洲市史編纂専門委員会	五輪塔（室町後期）
3	櫻井甚一	1978	珠洲市　正院町舘家		珠洲市史　第2巻資料編中世・寺院・歴史考古	珠洲市史編纂専門委員会	五輪塔（室町中～末期）
4	櫻井甚一	1978	珠洲市　高屋		珠洲市史　第2巻資料編中世・寺院・歴史考古	珠洲市史編纂専門委員会	五輪塔（室町中～後期）
5	櫻井甚一	1978	珠洲市　永山寺		珠洲市史　第2巻資料編中世・寺院・歴史考古	珠洲市史編纂専門委員会	無縫塔（室町期）
6	櫻井甚一	1978	珠洲市　吉祥寺		珠洲市史　第2巻資料編中世・寺院・歴史考古	珠洲市史編纂専門委員会	無縫塔（室町末期）
7	櫻井甚一	1978	珠洲市　忍久保家		珠洲市史　第2巻資料編中世・寺院・歴史考古	珠洲市史編纂専門委員会	五輪塔（室町初～後期）　宝篋印塔（室町
8	櫻井甚一	1978	珠洲市　金峰寺		珠洲市史　第2巻資料編中世・寺院・歴史考古	珠洲市史編纂専門委員会	五輪塔（室町初～後期）　宝篋印塔（室町中期）
9		1992	珠洲市　大谷則貞遺跡		大谷則貞	石川県立埋蔵文化財センター	五輪塔
10		1994	珠洲市　法住寺墓地		珠洲古陶関係遺跡詳細分布調査報告Ⅰ	珠洲市教育委員会	墓か
11	馬場宏	1954	内浦町　時長中世墳墓	石川県珠洲郡松波町字時長発見の五輪塔と骨壺	石川考古学研究会会誌第6号	石川考古学研究会	珠洲蔵骨器　五輪塔
12	馬場宏	1969	内浦町　時長中世墳墓	石川県珠洲郡松波町字時長発見の五輪塔と骨壺その2	石川考古学研究会会誌第12号	石川考古学研究会	五輪塔　宝篋印塔　珠洲蔵骨器
13	櫻井甚一	1981	内浦町　光明院		内浦町史　第1巻資料編自然・考古・社寺	内浦町史編纂専門委員会	五輪塔（室町初期）
14	櫻井甚一	1981	内浦町　堂間家		内浦町史　第1巻資料編自然・考古・社寺	内浦町史編纂専門委員会	五輪塔（室町期）蔵骨器（壺　すり鉢）
15	櫻井甚一	1981	内浦町　弥勒院		内浦町史　第1巻資料編自然・考古・社寺	内浦町史編纂専門委員会	五輪塔（室町初期）
16	櫻井甚一	1981	内浦町　不動寺山門前		内浦町史　第1巻資料編自然・考古・社寺	内浦町史編纂専門委員会	五輪塔（室町後期）
17	櫻井甚一	1981	内浦町　万福寺		内浦町史　第1巻資料編自然・考古・社寺	内浦町史編纂専門委員会	宝篋印塔（室町中期）
18		1984	内浦町　宮犬墳墓群		県内遺跡詳細分布調査報告書（S54・55年度）	石川県立埋蔵文化財センター	塚
19		1984	内浦町　秋吉中世墳墓		県内遺跡詳細分布調査報告書（S54・55年度）	石川県立埋蔵文化財センター	五輪塔　珠洲焼
20		1984	内浦町　松波中世墳墓		県内遺跡詳細分布調査報告書（S54・55年度）	石川県立埋蔵文化財センター	塚　板碑
21	櫻井甚一	1974	輪島市　真照寺		輪島市史　資料編第3巻考古・古文献資料	輪島市史編纂専門委員会	宝篋印塔（室町初期）
22	櫻井甚一	1974	輪島市阿部判官自尽跡		輪島市史　資料編第3巻考古・古文献資料	輪島市史編纂専門委員会	宝篋印塔（室町中期）
23	櫻井甚一	1974	輪島市　岩倉寺		輪島市史　資料編第3巻考古・古文献資料	輪島市史編纂専門委員会	五輪塔（室町初～中期）宝篋印塔（室町初期）
24	櫻井甚一	1974	輪島市　坂東家		輪島市史　資料編第3巻考古・古文献資料	輪島市史編纂専門委員会	五輪塔（室町前～中期）
25	平田天秋	1974	輪島市	輪島市内の珠洲焼資料について	石川考古学研究会会誌第17号	石川考古学研究会	蔵骨器
26	山田芳和	1976	能都町　谷屋遺跡	能都町の珠洲焼資料	石川考古学研究会会誌第19号	石川考古学研究会	蔵骨器
27		1978	能都町　藤波遺跡		能都町藤波二ツ谷1号塚・波並堂の上遺跡発掘調査報告書	石川県教育委員会	墓かそれとも経塚か
28	山田芳和	1982	能都町　谷屋遺跡		能都町史　第3巻　歴史編	能都町史編纂専門委員会	27の改訂版
29	浅田耕治	1982	能都町　藤波遺跡		能都町史　第3巻　歴史編	能都町史編纂専門委員会	28の改訂版
30	浅田耕治	1982	能都町　最安寺		能都町史　第3巻　歴史編	能都町史編纂専門委員会	五輪塔（鎌倉期）
31	浅田耕治	1982	能都町　霊山寺		能都町史　第3巻　歴史編	能都町史編纂専門委員会	五輪塔（室町初期）宝篋印塔（室町前期）
32	浅田耕治	1982	能都町　上日寺		能都町史　第3巻　歴史編	能都町史編纂専門委員会	五輪塔（室町初期）宝篋印塔（鎌倉末期）
33	浅田耕治	1982	能都町　妙栄寺		能都町史　第3巻　歴史編	能都町史編纂専門委員会	五輪塔（室町初期）宝篋印塔（鎌倉末～南北朝期）
34	浅田耕治	1982	能都町　間島墓地		能都町史　第3巻　歴史編	能都町史編纂専門委員会	五輪塔（鎌倉期）一石五輪塔（室町末期）
35	浅田耕治	1982	能都町　郷土館前		能都町史　第3巻　歴史編	能都町史編纂専門委員会	五輪塔（室町初期）
36	浅田耕治	1982	能都町　新善光寺付近		能都町史　第3巻　歴史編	能都町史編纂専門委員会	一石五輪塔（室町中期）
37	浅田耕治	1982	能都町　長楽寺		能都町史　第3巻　歴史編	能都町史編纂専門委員会	五輪塔（天文21年紀銘）
38	浅田耕治	1982	能都町　塩谷寺		能都町史　第3巻　歴史編	能都町史編纂専門委員会	板石五輪塔（室町後期）
39		1975	柳田村日詰脇行者塚中世墓		柳田村史	柳田村	

40		1975	柳田村 合鹿熊野堂塚中世墳墓		柳田村史	柳田村	
41		1977	柳田村 山王ヶ丘中世墓地		柳田村の集落誌	柳田村	珠洲焼壺（室町中期）
42		1977	柳田村　黒川中世墓		柳田村の集落誌	柳田村	塚　五輪塔
43		1977	柳田村 市姫塚中世墳墓		柳田村の集落誌	柳田村	塚　珠洲焼壺
44		1977	柳田村 合鹿熊野堂塚中世墳墓		柳田村の集落誌	柳田村	塚　五輪塔
45		1980	柳田村　当目兜地遺跡		当目兜地遺跡	石川県立埋蔵文化財 センター	
46		1988	柳田村 五十里洞穴中世墳墓		五十里A遺跡付 五十里洞穴中世墳墓	石川県立埋蔵文化財 センター	やぐら状遺構
47	四柳嘉章・ 辻本馨	1982	穴水町　内浦地区	57年度古墳群分布 調査速報（その3）	石川考古142号	石川考古学研究会	
48		1984	穴水町 内浦ドンヤチ中世墓	穴水町字内浦所在 中世墳墓の測量調査	石川県高等学校文化連盟 郷土部会報22号		
49		1984	穴水町 内浦ドンヤチ中世墓	中世墳墓（穴水町内浦 所在）の測量調査	夕映え13号	石川県立中島高等学校 生徒会	
50		1985	穴水町 明泉寺鎌倉屋敷		穴水町の文化財	穴水町教育委員会	
51		1987	穴水町西川島 遺跡群白山橋遺跡		西川島一能登における 中世村落の発掘調査	穴水町教育委員会	配石墓 （15～16世紀前半）
52		1992	穴水町　長家		穴水町の集落誌	穴水町教育委員会	五輪塔（弘治2年紀銘）
53		1992	穴水町 前波墓地中世墓		穴水町の集落誌	穴水町教育委員会	五輪塔
54		1992	穴水町　洞光寺		穴水町の集落誌	穴水町教育委員会	五輪塔　宝篋印塔
55		1992	穴水町　長雲寺跡		穴水町の集落誌	穴水町教育委員会	五輪塔　骨
56		1992	穴水町　明王院		穴水町の集落誌	穴水町教育委員会	五輪塔（室町末期）
57	櫻井甚一	1972	七尾市　長齢寺		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	一石五輪塔 （天文15年紀銘）
58	櫻井甚一	1972	七尾市　徳翁寺		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	一石五輪塔 （天正□年紀銘）
59	櫻井甚一	1972	七尾市　殿山墓地		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	五輪塔 宝篋印塔　無縫塔
60	櫻井甚一	1972	七尾市湯川町大坪 通称そうじんだ		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	五輪塔
61	櫻井甚一	1972	七尾市 天神河原町佐野家		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	五輪塔
62	櫻井甚一	1972	七尾市　妙観院 （伝畠山義春墓）		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	無縫塔（天正7年紀銘）
63	櫻井甚一	1972	七尾市　本行寺		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	五輪塔　宝篋印塔
64	櫻井甚一	1972	七尾市　徳田公民館		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	一石五輪塔
65	櫻井甚一	1972	七尾市 新保町共同墓地		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	五輪塔
66	櫻井甚一	1972	七尾市 下湯川町板屋家		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	宝篋印塔
67	櫻井甚一	1972	七尾市　海門寺		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	宝篋印塔　無縫塔 （天正4年紀銘）
68	櫻井甚一	1972	七尾市　助次山墓地		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	宝篋印塔
69	櫻井甚一	1972	七尾市　光善寺		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	宝篋印塔
70	櫻井甚一	1972	七尾市　大地主神社		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	宝篋印塔
71	櫻井甚一	1972	七尾市　長壽寺		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	宝篋印塔
72	櫻井甚一	1972	七尾市　印勝寺		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	宝篋印塔
73	櫻井甚一	1972	七尾市　実相寺		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	宝篋印塔
74	櫻井甚一	1972	七尾市　安滓寺		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	宝篋印塔
75	櫻井甚一	1972	七尾市 池崎町共同墓地		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	宝篋印塔
76	櫻井甚一	1972	七尾市　岩本家		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	宝篋印塔
77	櫻井甚一	1972	七尾市　温井町酒井家		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	宝篋印塔
78	櫻井甚一	1972	七尾市　温井町多村家		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	宝篋印塔
79	櫻井甚一	1972	七尾市 東三階町藤井家		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	宝篋印塔
80	櫻井甚一	1972	七尾市　徳雲寺		七尾市史　資料編　第5巻	七尾市史編纂専門委員会	宝篋印塔
81		1982	七尾市 細口源田山遺跡		細口源田山遺跡	七尾市教育委員会	土坑墓（14～16世紀）
82	平田天秋	1982	能登島町 祖母ヶ浦石塚遺跡		能登島町史　資料編 第一巻　考古編	能登島町史専門委員会	鏡　北宋銭　火葬骨
83	平田天秋	1982	能登島町 閏観音堂中世墳墓群		能登島町史　資料編 第一巻　考古編	能登島町史専門委員会	塚　五輪塔
84	平田天秋	1982	能登島町 閏堂の下遺跡		能登島町史資料編 第一巻　考古編	能登島町史専門委員会	石積塚　五輪塔
85	櫻井甚一	1982	能登島町 閏観音堂中世墳墓群		能登島町史　資料編 第一巻　造形文化資料編	能登島町史専門委員会	五輪塔 （室町初～中期）
86	櫻井甚一	1982	能登島町 閏行者ヶ端遺跡		能登島町史　資料編 第一巻　造形文化資料編	能登島町史専門委員会	五輪塔（室町前期）
87	櫻井甚一	1982	能登島町 祖母ヶ浦石塚遺跡		能登島町史　資料編 第一巻　造形文化資料編	能登島町史専門委員会	五輪塔（室町前期）
88	櫻井甚一	1982	能登島町 向田信光寺		能登島町史　資料編 第一巻　造形文化資料編	能登島町史専門委員会	五輪塔（室町中期）
89	櫻井甚一	1982	能登島町 野崎光顕寺中世墓地		能登島町史　資料編 第一巻　造形文化資料編	能登島町史専門委員会	五輪塔 （室町前～中期）
90	櫻井甚一	1982	能登島町 目浄尊寺境内遺跡		能登島町史　資料編 第一巻　造形文化資料編	能登島町史専門委員会	宝篋印塔（室町期）
91	櫻井甚一	1985	能登島町	中世能登島における 社寺の信仰と文化財	能登島町史　通史編	能登島町史専門委員会	石川縣銘文集成研究 編　能登加賀の中世 文化1990　にて再版

92	櫻井甚一	1966	中島町　西岸小学校横		石川県中島町史（資料編）	中島町史編纂委員会	宝篋印塔（鎌倉後期）
93	櫻井甚一	1966	中島町　井上家		石川県中島町史（資料編）	中島町史編纂委員会	宝篋印塔（鎌倉後期）
94	櫻井甚一	1966	中島町 虚空蔵山虚空蔵社前		石川県中島町史（資料編）	中島町史編纂委員会	宝篋印塔（室町期） 五輪塔（室町初期）
95	櫻井甚一	1966	中島町　谷口家		石川県中島町史（資料編）	中島町史編纂委員会	宝篋印塔（室町初期）
96	櫻井甚一	1966	中島町　白山神社		石川県中島町史（資料編）	中島町史編纂委員会	五輪塔（室町期）
97	櫻井甚一	1966	中島町　旧富来街道		石川県中島町史（資料編）	中島町史編纂委員会	五輪塔
98	櫻井甚一	1966	中島町　覚永寺		石川県中島町史（資料編）	中島町史編纂委員会	五輪塔
99	櫻井甚一	1966	中島町　的場家		石川県中島町史（資料編）	中島町史編纂委員会	五輪塔（室町期）
100	櫻井甚一	1966	中島町　正永寺		石川県中島町史（資料編）	中島町史編纂委員会	一石五輪塔
101	櫻井甚一	1966	中島町　鈍打出帳所		石川県中島町史（資料編）	中島町史編纂委員会	無縫塔（室町初期）
102	櫻井甚一	1966	中島町　定林寺		石川県中島町史（資料編）	中島町史編纂委員会	無縫塔（室町後期）
103	平田天秋	1979	中島町 長浦墳墓群		日本考古学年報30 （1977年度版）	日本考古学協会	
104	西野秀和	1980	中島町 上町マンダラ遺跡		日本考古学年報31 （1978年度版）	日本考古学協会	集石墓　火葬骨 珠洲焼壺　室町初期
105	西野秀和	1980	中島町 上町マンダラ遺跡	中島町マンダラ中世墓址群 をめぐって	日本城郭体系ー新潟・ 富山・石川ー	新人物往来社	104と同遺跡
106	唐川明史	1985	中島町　殿山城跡	殿山城跡附近 出土の珠洲古陶	石川考古学研究会 会誌28号	石川考古学研究会	104と同遺跡
107		1991	中島町 上町カイダ遺跡		上町カイダ遺跡	石川県立埋蔵文化財 センター	五輪塔　珠洲焼甕
108		1992	中島町 中笠師中世墓	中島町中笠師中世墓発掘 調査報告	石川県立埋蔵文化財センター 年報第12号	石川県立埋蔵文化財配 センター	石墓　五輪塔　珠洲 蔵骨器　14世紀後半
109	垣内 光次郎	1996	中島町 上町マンダラ遺跡等	熊木びとの暮らしと墳墓	中島町史　通史編	中島町史編纂専門委員会	104と同遺跡
110		1991	田鶴浜町 杉森テラアト遺跡		杉森テラアト遺跡	石川県立埋蔵文化財 センター	五輪塔　珠洲焼甕 室町中～後期
111		1992	田鶴浜町 垣吉マツサキ山中世墓		垣吉A29・30号墳 垣吉マツサキ山中世墓	石川県立埋蔵文化財 センター	五輪塔　珠洲焼甕
112		1994	田鶴浜町 垣吉マツサキ山遺跡等	信仰のはじまり	田鶴浜町の歴史　上	田鶴浜町史編纂委員会	配石墓 珠洲焼壺　14世紀
113		1994	田鶴浜町 大津ロクベエ遺跡		大津ロクベエ遺跡Ⅱ	石川県立埋蔵文化財 センター	集石　道
114		1995	田鶴浜町 三引C・D遺跡		石川県立埋蔵文化財センター 年報第17号	石川県立埋蔵文化財 センター	
115		1996	田鶴浜町 三引C・D遺跡		三引遺跡発掘調査の概要	石川県立埋蔵文化財 センター	
116	櫻井甚一	1966	鹿島町　栄林寺		石川県鹿島町史	石川県鹿島町史編纂専門 委員会	五輪塔（室町初期） 宝篋印塔（鎌倉末～室 町初期）
117	櫻井甚一	1966	鹿島町　白山神社		石川県鹿島町史	石川県鹿島町史編纂専門 委員会	五輪塔（室町中期）
118	櫻井甚一	1966	鹿島町　久乃木神社		石川県鹿島町史	石川県鹿島町史編纂専門 委員会	五輪塔（室町中期） 宝篋印塔
119	櫻井甚一	1966	鹿島町 二宮共同墓地		石川県鹿島町史	石川県鹿島町史編纂専門 委員会	五輪塔（室町中期）
120	櫻井甚一	1966	鹿島町 石動山五智院		石川県鹿島町史	石川県鹿島町史編纂専門 委員会	五輪塔（鎌倉後期） 宝篋印塔（鎌倉後期）
121	櫻井甚一	1966	鹿島町 石動山心王院		石川県鹿島町史	石川県鹿島町史編纂専門 委員会	一石五輪塔（室町末 期）
122	櫻井甚一	1966	鹿島町 石動山馬捨山		石川県鹿島町史	石川県鹿島町史編纂専門 委員会	宝篋印塔（鎌倉末～室 町初期）
123	櫻井甚一	1966	鹿島町　円光寺		石川県鹿島町史	石川県鹿島町史編纂専門 委員会	五輪塔（室町期）　宝 篋印塔（室町初期）
124	櫻井甚一	1966	鹿島町　沢出		石川県鹿島町史	石川県鹿島町史編纂専門 委員会	五輪塔
125	櫻井甚一	1972	鹿島町	石動山の造形文化財	能登の文化財第八輯	能登文化財保護連絡協議会	石川縣銘文集成研究 編　能登加賀の中世 文化　1990　にて再版
126	平田天秋	1982	鹿島町 小竹火宮社跡遺跡		鹿島町史　資料編（続） 上巻	鹿島町史編纂専門委員会	鏡　土師皿
127	平田天秋	1982	鹿島町	鹿島町の珠洲古陶	鹿島町史　資料編（続） 上巻	鹿島町史編纂専門委員会	
128	櫻井甚一	1986	鹿島町 五智院跡		鹿島町史　石動山資料編	鹿島町史編纂専門委員会	五輪塔　宝篋印塔 （鎌倉期）
129	櫻井甚一	1986	鹿島町　大師堂墓地		鹿島町史　石動山資料編	鹿島町史編纂専門委員会	五輪塔（鎌倉末～室町 五前期）宝篋印塔（鎌 倉～室町期）
130	櫻井甚一	1986	鹿島町　心王院		鹿島町史　石動山資料編	鹿島町史編纂専門委員会	一石五輪塔（室町末 期）　宝篋印塔（基礎 のみ）
131	櫻井甚一	1986	鹿島町　宝池院墓地		鹿島町史　石動山資料編	鹿島町史編纂専門委員会	五輪塔（鎌倉末～室町 期）　一石五輪塔 （室町後期）
132	櫻井甚一	1986	鹿島町　焼尾廃村		鹿島町史　石動山資料編	鹿島町史編纂専門委員会	宝篋印塔（基礎のみ）
133	櫻井甚一	1986	鹿島町　旧観坊		鹿島町史　石動山資料編	鹿島町史編纂専門委員会	五輪塔　一石五輪塔 （南北朝期）
134	櫻井甚一	1986	鹿島町　宝性院墓地		鹿島町史　石動山資料編	鹿島町史編纂専門委員会	五輪塔
135	谷内尾晋司 平田天秋 藤則雄 山本一信	1986	鹿島町　石動山 大師堂跡共同墓地跡	石動山の遺構	鹿島町史　石動山資料編	鹿島町史編纂専門委員会	土師器
136		1995	鹿島町 石動山大宮坊跡		史跡石動山環境整備事業 報告書Ⅱ	鹿島町教育委員会	五輪塔
137		1990	鹿西町 阿弥陀藪遺跡	石川県鹿西町における 考古学的分布調査概報 －1989年－	日本海文化第16号	金沢大学考古学研究室・ （財）古代学協会北陸支部	石仏　火葬骨　銅銭
138		1991	鹿西町 阿弥陀藪遺跡	阿弥陀藪遺跡の発掘 ー1990年ー	金沢大学日本海域研究所 報告第23号	金沢大学 文学部考古学研究室	137と同遺跡
139	馬瀬智光	1991	鹿西町 阿弥陀藪遺跡	阿弥陀藪遺跡出土の 珠洲焼小壺（1）	金大考古第19号	金沢大学 文学部考古学研究室	137と同遺跡
140		1995	鹿西町 谷内ブンガヤチ遺跡		谷内・杉谷遺跡群	石川県立埋蔵文化財 センター	土坑墓　珠洲焼擂鉢 （14世紀前半）
141	櫻井甚一	1975	羽咋市　永光寺遺跡	羽咋の造形文化資料 と建造物	羽咋市史　中世・社寺編	羽咋市史編纂委員会	無縫塔（元弘元年紀銘）

142		1982	羽咋市 福水朝日山遺跡		丹治山福水寺遺跡	羽咋市教育委員会	塚　珠洲焼壺
143	櫻井甚一	1982	羽咋市 福水朝日山遺跡	丹治山福水寺遺跡関連の 造形文化資料	丹治山福水寺遺跡	羽咋市教育委員会	
144		1984	羽咋市気多社僧坊群 遺跡(寺家ブタイ地区)		羽咋市気多社僧坊跡群	石川県立埋蔵文化財センター	五輪塔
145		1984	羽咋市　気多社僧坊 群遺跡(寺家横穴)		羽咋市気多社僧坊跡群	石川県立埋蔵文化財センター	墓か
146		1984	羽咋市 柴垣1号地下式横穴		柴垣ところ塚古墳　柴垣ご ぜん塚古墳発掘調査報告書	羽咋市教育委員会	墓か
147		1984	羽咋市 柴垣2号地下式横穴		柴垣ところ塚古墳　柴垣ご ぜん塚古墳発掘調査報告書	羽咋市教育委員会	墓か
148		1984	羽咋市 柴垣3号地下式横穴		柴垣ところ塚古墳　柴垣ご ぜん塚古墳発掘調査報告書	羽咋市教育委員会	墓か
149		1984	羽咋市 柴垣4号地下式横穴		柴垣ところ塚古墳　柴垣ご ぜん塚古墳発掘調査報告書	羽咋市教育委員会	墓か
150		1984	羽咋市 柴垣5号地下式横穴		柴垣ところ塚古墳　柴垣ご ぜん塚古墳発掘調査報告書	羽咋市教育委員会	墓か
151		1984	羽咋市 柴垣6号地下式横穴		柴垣ところ塚古墳　柴垣ご ぜん塚古墳発掘調査報告書	羽咋市教育委員会	墓か
152	櫻井甚一	1974	富来町　福山家		富来町史　資料編	富来町史編纂委員会	五輪塔(室町前期) 宝篋印塔(室町中期)
153	櫻井甚一	1974	富来町　相見神社		富来町史　資料編	富来町史編纂委員会	宝篋印塔
154	櫻井甚一	1974	富来町　猿田彦神社		富来町史　資料編	富来町史編纂委員会	五輪塔　宝篋印塔
155	櫻井甚一	1974	富来町　松尾寺		富来町史　資料編	富来町史編纂委員会	五輪塔(室町中期) 無縫塔(室町後)
156	櫻井甚一	1976	富来町 地頭中世墳墓窟群	富来地頭町の中世墳墓窟	富来町史　続資料編	富来町役場	石川縣銘文集成研究 編　能登加賀の中世 文化　1990にて再版
157		1995	富来町 東小室キンダ遺跡		石川県立埋蔵文化財センター 年報第17号	石川県立埋蔵文化財	土坑墓
158	岡部修	1955	志賀町	能登国羽咋郡志加浦に 於ける五輪塔の研究	石川県羽咋郡旧福野潟 周辺総合調査報告書	石川考古学研究会	
159		1974	志賀町 矢駄横穴状遺構		志賀町矢駄遺跡	石川県教育委員会	地下式坑
160	橋本澄夫	1974	志賀町 矢駄横穴状遺構	志賀町の考古資料 歴史時代	志賀町史　資料編 第1巻	志賀町史編纂委員会	
161	吉岡康暢	1974	志賀町 印内ラントウ横穴群	志賀町の考古資料 歴史時代	志賀町史　資料編 第1巻	志賀町史編纂委員会	墓か
162	櫻井甚一	1974	志賀町 石積六角地蔵堂	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編 第1巻	志賀町史編纂委員会	
163	櫻井甚一	1974	志賀町　浄真寺	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編 第1巻	志賀町史編纂委員会	五輪塔(室町初～中期)
164	櫻井甚一	1974	志賀町　大日堂	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編　第1巻	志賀町史編纂委員会	五輪塔(室町後期)
165	櫻井甚一	1974	志賀町　上棚若狭家	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編　第1巻	志賀町史編纂委員会	五輪塔(室町後期)
166	櫻井甚一	1974	志賀町　赤住山下家	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編　第1巻	志賀町史編纂委員会	五輪塔
167	櫻井甚一	1974	志賀町　明正寺	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編　第1巻	志賀町史編纂委員会	五輪塔
168	櫻井甚一	1974	志賀町　安部屋安部家	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編　第1巻	志賀町史編纂委員会	五輪塔
169	櫻井甚一	1974	志賀町　気多神社	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編　第1巻	志賀町史編纂委員会	五輪塔　宝篋印塔 (室町後期)
170	櫻井甚一	1974	志賀町　白山神社	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編　第1巻	志賀町史編纂委員会	五輪塔
171	櫻井甚一	1974	志賀町　曼陀羅寺	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編　第1巻	志賀町史編纂委員会	五輪塔
172	櫻井甚一	1974	志賀町 安津見大塚家	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編　第1巻	志賀町史編纂委員会	五輪塔
173	櫻井甚一	1974	志賀町　道興寺	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編　第1巻	志賀町史編纂委員会	宝篋印塔(南北朝～室 町期)　無縫塔(南北 朝～室町期)
174	櫻井甚一	1974	志賀町　観音堂	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編　第1巻	志賀町史編纂委員会	五輪塔
175	櫻井甚一	1974	志賀町　光済寺	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編　第1巻	志賀町史編纂委員会	五輪塔
176	櫻井甚一	1974	志賀町　専念寺	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編　第1巻	志賀町史編纂委員会	宝篋印塔(室町初期)
177	櫻井甚一	1974	志賀町　徳雲寺	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編　第1巻	志賀町史編纂委員会	無縫塔(室町後期)
178	櫻井甚一	1974	志賀町　坊の上	志賀町の造形文化資料 石造遺物	志賀町史　資料編　第1巻	志賀町史編纂委員会	無縫塔(室町後期)
179	平田天秋	1979	志賀町　坪野墳墓群		日本考古学年報30 (1977年度版)	日本考古学協会	塚　数珠玉　火葬骨
180		1995	志賀町 矢駄アカメ遺跡		石川県立埋蔵文化財センター 年報第17号	石川県立埋蔵文化財 センター	土坑墓か　土師皿 (12世紀中～後半)
181	芝田悟	1998	志賀町 坪野墳墓群	羽咋郡志賀町坪野中世墓 の出土銭貨	石川考古学研究会会誌41号	石川考古学研究会	珠洲焼甕
182	櫻井甚一	1974	志雄町　敷浪 やわらぎ郷	志雄町の造形文化資料 石造遺物	石川県志雄町史	石川県志雄町史編纂 専門委員会	一石五輪塔 (天文5年紀銘)
183	櫻井甚一	1974	志雄町 萩島八幡宮	志雄町の造形文化資料 石造遺物	石川県志雄町史	石川県志雄町史編纂 専門委員会	五輪塔　宝篋印塔 (室町中～後期)
184	河村好光	1982	押水町　南吉田 向山中世墳群	河原向山1号墳の調査 (古墳分布調査第6次)	石川考古138号	石川考古学研究会	
185		1984	押水町 河原中世墳墓群		県内遺跡詳細分布調査 報告書(昭和54･55年度)	石川県立埋蔵文化財 センター	塚　珠洲焼
186		1984	押水町　宿エゾエ 山中世墳墓群		県内遺跡詳細分布調査 報告書(昭和54･55年度)	石川県立埋蔵文化財 センター	塚
187		1988	押水町 竹生野遺跡		竹生野遺跡	石川県立埋蔵文化財 センター	塚　火葬炉
188		1977	高松町 元女堂山中世墳墓群		高松町元女堂石塚群 調査概要	高松町教育委員会	塚　珠洲焼壺･擂鉢 (12～14世紀)

4．金沢城下町の墓制研究に向けて

近世墓研究への志向は、私達のささやかな集まりが発足するきっかけであったが、まだ明確な方向性を持つことができず、暗中模索といった段階にある。今回は近年の発掘調査成果の紹介を兼ね、金沢城下町の墓地・墓制について、印象めいたことを述べるに留めたい。

金沢城下町で現在までに発掘調査された墓地遺跡は、久昌寺墓地・木ノ新保遺跡・経王寺墓地の３カ所である。いずれも未報告であるが、久昌寺墓地については一部内容が公表され[1]、木ノ新保遺跡は筆者が調査を担当しているので[2]、この二遺跡の概要をまず示そう。

久昌寺は金沢市北安江町地内に位置し、現在まで法灯の続く曹洞宗寺院である。慶長15年（1610）に造立され、17世紀中頃に当地に移転したとされる。発掘調査は、近代以後鉄道敷地となった墓地の一角を対象に行われ、土葬墓212基、火葬墓61基が検出された。土葬墓の内部主体は、長方形木棺・円筒木棺（早桶）・甕棺があり、それぞれ木郭を持つ場合がある。上層（19世紀代）では長方形木棺を中心とし、甕棺・火葬墓もみられ、下層（17世紀後半～18世紀）は円筒木棺が主体となる。火葬墓を除いて、天蓋を棺蓋上に設置したまま埋納される例がしばしば認められる。副葬品は長方形木棺・火葬墓には少ないが、円筒木棺・甕棺には、六道銭・数珠の他、漆器・木製品を豊富に所持する例が多い。墓地造営の開始年代については、寺の移転時期とも関わる問題であるが、寛永６年（1629）銘の墓石が出土していることが注目される。格式ある曹洞宗寺院の境内墓地であることから、被葬者は武士階級であると考えられる。

木ノ新保遺跡は久昌寺の南西約400mに位置する城下町遺跡であり、その最古段階の遺構として土葬墓19基、火葬墓７基が検出された。土葬墓の内部主体は円筒木棺が主で、樽の転用例も認められる他、乳児用と考えられる曲物等がある。火葬墓は容器を確認できないが、有機質製であった可能性が高い。土葬墓には天蓋・灯籠・模造木製鍬等の葬具を墓坑に入れた例が若干ある。確実な成人用の棺は少なく、成人以下の墓が主体を占める墓域であったと考えられる。副葬品は個々の墓により多寡があり、なかには六道銭以下、金属製品・木製品・漆器など多種多様な品を有するものも二例確認される。駕籠・行器などのミニチュア木製品、指樽・衣桁（ないし手拭い掛け）などのミニチュア漆器（雛道具？）が特に目を引く。副葬・供献の陶磁器類の年代、また六道銭が全て渡来銭で構成されている点からも、この墓群が17世紀前半代に営まれたことは明白である。調査区内では寺院遺構を確認していないが、周囲は近世初期から町場化していたらしく、また土葬が主体であることから、火葬が主体であったと推測される農村墓地とは考えにくい。副葬品の内容をみても、被葬者は武士階級、あるいは招来の富裕町人とみなすのが妥当である。本来寺院に付属する墓地であったものが、寺院移転に伴い改葬・廃絶への道を辿ったと考えておきたい。

上記二例における被葬者集団は、前田氏に従って他国より加賀入りした武士もしくは富裕町人層であると思われる。その根拠の一つは、土葬が主体である点である。金沢城下町の町人の大多数は真宗門徒であり、遺骸処理に際しては火葬に処されたと思われる。真宗門徒に火葬が多いことは、『諸国風俗問状答』[3]に記される通りであり、また金沢町人の主たる葬法が火葬であったことは、昭和に入ってからのものだが『昔の金澤』[4]等の随筆に見える。但し発掘調査では火葬主体の墓地は未確認であり、特に近世初期の状況は今後の課題といえる。なお市街周辺には三昧＝火葬場が七カ所あったことが、「寛政金沢地図」に記されている。大坂・京都・堺等、他の近世都市でも類例があり、特に堺では三昧の一角が発掘調査され、付属墓地の存在が明らかになっている[5]。おそらく金沢の場合も三昧には共同墓地が付随しており、主として都市下層民の墓所として機能していたのではなかろうか。

このように金沢城下町では、都市内の寺院境内墓地と、都市外の火葬場付属墓地とがあったと推測

されるが、この他城下南方郊外に野田山墓地がある。天正16年（1587）、藩祖前田利家の兄利久を葬ったことを濫觴とし、利家自身も慶長４年（1599）遺言により埋葬されて後、前田氏代々の墓所となった。やがて藩士・町人もここを墓所とすることが許され、現在は金沢市民の共同墓地となっている。遅くとも元禄頃（17世紀末～18世紀初）には、藩主一族以外のかなりの人々が、墓所を設けうるようになったことが、地誌類の記載から推測されるが[6]、その経緯・時期については明言されていない。

この墓地については、なお私達は白紙に近い状態であり、先行研究を含めた文献資料の渉猟と、並行して現地踏査を行う必要を感じている。また全国各地の城下町に、このような郊外型の広域墓地が存在するのかどうかも、課題として追求してゆくつもりである。

註

1）　1996・1997年度金沢市教育委員会調査。本稿では96年度調査成果のみ下記発表要旨より紹介した。
　　増山　仁1997　「金沢城下における近世墓－久昌寺墓地を中心として」『西日本近世墓の諸相』　関西近世考古学研究会

2）　1993年度石川県立埋蔵文化財センター調査。

3）　『諸国風俗問状』・『諸国風俗問状答』は、文化12年頃（1815）発起された各地の風俗についての調査依頼（質問状）とその答書である。このうち北越（越後北部）・越後国長岡・常陸国水戸・陸奥国白河の各地で、一向宗（浄土真宗）は概ね火葬によるとの報告がなされている。なお加賀については答書自体今に伝わっていない。テキストは下記文献による。
　　竹内利美他編1969　『日本庶民生活史料集成　第九巻　風俗』　三一書房

4）　氏家榮太郎1932　『昔の金澤』　金沢文化協会

5）　下記の発表要旨を参照した。
　　嶋谷和彦1996　「出土六道銭からみた近世・堺の墓地と三昧」『江戸時代の墓と墓制』発表要旨　江戸遺跡研究会
　　野田芳正1997　「堺の近世墓」『西日本近世墓の諸様相』　関西近世考古学研究会

6）　森田平次『金沢古蹟志』（明治24年）には、大乗寺27世卍山道白の『卍山和尚広録』、俳人鶴屋句空の『句空草庵集』、同じく俳人綿屋北茎の『北国巡杖記』等が取り上げられている。これらは表現の違いはあれ、いずれも野田山に諸人の墓が営まれたことを示唆している。このうち卍山道白が加賀を退去したのが元禄４年（1691）、『句空草庵集』の刊行は同13年（1700）のことである。

木ノ新保遺跡16号墓

石川県埋蔵文化財情報
創刊号

発行日　1999(平成11)年3月31日

発行者　(財)石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477　FAX 076-229-3731

印　刷　(株)橋本確文堂